
レジナレス・ワールド

新羅三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジナレス・ワールド

【NZコード】

N7503Y

【作者名】

新羅三郎

【あらすじ】

強くてニユーワールド。VRMMO「レジナレス・ワールド」プレイ中にいきなり意識を失ったシユウとサラ。気がつくと、ゲーム世界そつくりな「現実」に放り込まれて。ゲーム時と同じ能力を持ちながら旅する一人の間に、人化する銀魔狼、ハイエルフの美姫らが割り込んできて

「う…ん」

はるか地平線が春の陽気にかすんでいる。そこにさわやかな風が渡つていく。

そよぐ風が美しい新緑の草を揺らし、彼の頬をくすぐった。

気持ちよさとくすぐったさに田中覚めると、隣から、同じような声を上げる女性の声が聞こえ、田中修の意識は、一気に覚醒する。寝ころんだまま横を見ると、そこには、良く見知った美しい女性の顔があった。

「あれ？ サラさん？」

「ん…シユウくん？」

シユウの家の一階上、同じマンションの住人である。シユウより2歳上の二十歳。

美しいナチュラルウェーブのあわい金髪は、普段は無造作に束ねられているが、降ろすと腰まであるほどに長い。今はなぜか降ろしている。

瞳は透き通るよう美しいブルー。光の加減で美しく変化し、見るものを魅了してやまない。

北欧系の大柄で整つた肉体。

日本人の男の眼を釘付けにするほどの大きさを誇る美しく形の良い胸、その下になだらかなカーブでくびれていく腰と、そこからふくらんでいく発達した骨盤にあわせた肉付きは、彼女の造形を見ただけですべての男に強烈に印象づける。

それでいて年齢がわかりにくいほどあどけない表情をするので、整いすぎた彫りの深い美しい顔なのに、少しも冷たい印象を与える。

本業のモデルであるふたつ上の彼女の姉のコリアは、普段から冷

静で無表情で、さらに整った容姿と美貌を誇っているため、一種近寄りがたい偉容だが、サラは、豊かな表情がとても魅力的で、シユウことについては、サラのほうがより異性として惹かれるタイプだった。

一人は、草の上で仰向けの姿勢で顔だけ動かしある互いの姿を確認し、それぞれひじで上半身を起こしあげる。

サラの眼が、シユウの顔から、すっと下半身のほうに流れる。その目線に応じてシユウも、自分の下半身に。

「きやつ！」

サラが思わず悲鳴を上げる。それはほんの小さな悲鳴だったが、シユウの意識を一瞬で沸騰させるに充分だった。

「なつ……！　えつ！　えつ？」

何一つ身につけていない生まれたままの姿。目覚めの瞬間の男性特有のあの状態になつていなかつたのは幸か不幸か？

シユウは飛び起き、いわゆる体育座りで股間を隠し、両手で出来るだけいろんな物を見えないようにガードしてみた。

そして、固まってるサラを見る。

顔から、胸、そして……。

青ざめたシユウの顔がまるまる赤く染まつていぐ。

その視線に気がついたサラが自分の姿に気づく。

「あ……！」、「めつ」

「いやつ……！」

とつさに左手で胸を隠そうとするサラ。だが、胸に巻き付けた左手が、サラの大きすぎる胸の形を複雑に変えることと、むしろ男にとつては『眼に毒』な事になつていぐ。

「さて」

ほほパニッシュ状態と言つていい一人の精神に冷や水を浴びせるほどに冷静な、だが威厳に満ちた男性の声が、一人の正面から発せられたことで、この、不可解で、あり得ない状況に変化が生まれた。

「田野中修、サラ・ヨハンセン。落ち着いたかね？」

二人の目の前に、青白く光る直径5cmくらいのガラス玉のようなものが浮かんでいる。

そして、どうやらそれが「しゃべって」とるらしい。

その声は、どうもある程度年配の、男性のよくな響きだつた。

「まず、一人に詫びねばならぬ事がある」

それは、存在するだけで一人に威圧感を与え、興奮を沈静化させるに充分だったが、その詫びの言葉がきつかけになつて、一人はやつと硬直から解き放たれた形になつた。

「君たちは、今ここで目覚める直前、何をしていたか覚えているだろつか？」

「…ゲームをしてたと思います」

とまどいながらシユウは答えた。眼をあわすと、サラも小さくうなずいた。

VRMMO。21世紀中頃に急速に発展した、ヴァーチャルリアリティ技術を応用した体感型仮想現実装置をつかつて、オンラインでプレイできるロールプレイングゲームの一種。

神経パルスを模倣することで、ある一定のレベルまでは五感をだまし、プレイヤーによりリアルな娛樂を提供するそのゲームは、急速な普及によつてコストが下がると同時に、かつてない規模の市場を形成していった。

意外にもお互いが知らなかつたが、一人は、『レジナレス・ワールド』というMMOに参加しているプレイヤーだつた。

「そうだ。一人とも、感覚的には、つい今しがたまで、自分の部屋でゲームをしていたと感じておるであろう?」

「一人は小さくうなづく。

「君たちは、意識を失った瞬間に、事故にあった 我々のミスで」

要を得ない説明を総合すると、ショウとサラは、なんらかの理由でこの世界に『存在』することになってしまったようだ。

その理由も、意味も全くわからない。何を聞いても、この目の前の玉は、詫びるばかりで理由をいわない。

ただ、この世界はレジナレス・ワールドに違いない、そして、二人はここに存在すること。そして、元のレジナレス・ワールドと違ひ、ログインしているVRマシンはないことはわかった。

「私たちの装備はどうなったんですか?」

サラが尋ねる。さすがに、全く意味もわからない上、丸裸にされ、なにも荷物も無しにこの世界に放り出されれば。もし、レジナレス・ワールドの中というのなら、一晩で命はないだらう。

「ああ、すまない。君たちの荷物は、概念上の ステータスといつたか?その中にすべて収められている」

二人は、それまでプレイでやっていたように、ステータスを開いてみる あつた。

だが、あつたのはアイテムガジェットのみで、ステータスパラメータや、装備画面は見あたらない。

「これ、どうやって装備するんですか?」

ショウは尋ねてみた。

「取り出して、自分たちで着用してくれ

「へえ、リアルですねえ」

ショウは、視点移動でアイテムを選択し、取り出してみた。

じや。

目の前に、選択した装備 侍の羽織袴が現れた。

ふわり、と目の前に浮かび上がり、手に取った瞬間、ずしり、と

重さが加わる。なかなか便利なものだ。

同じように、草履・刀と、アクセサリであるすばやさの指輪と陣笠を選び、早速着替えてみた。

何となく見てはいけないような気がして反らしていた視線をサラに向け、ちらりと盗み見る。

ほつとするような、残念なようなところだが、サラはすっかり、美しい白銀のプレートメイルにブーツ、そしてふた振りのレイピアを腰に佩いていた。

シユウと視線が合つて、ちょっと照れたようにはにかんだサラ。それを見て、また真っ赤になつてうつむくシユウ。

「ところで、ステータスがきちんと機能していないようですか？」

サラが光の玉に尋ねてみた。

「そうだ、残念ながら、この世界は、厳密に说是ゲームではない」

光の玉は、とんでもないことをいいだした。

「君たちは、この世界で、今まで過ごしたように生きていけるだろう。だが

「

光の玉は、また衝撃的な事実を伝えた。

つまり、この世界は、一人にとつて現実そのものであり、パラメータなどで計つたり見たりすることの出来ない「リアル」である。「君たちの『死』は、そのままの命の終焉だ。そして、君たちが何かの命を奪えば、それらもまた、『死』を迎えるであらう。これはゲームではなく、復活点などもない」

「そ、そんな！」

「その事実を知っているのは、この世界では君たちのみだ。我々は、この世界を守り、維持はするが、手出しあしない」

「冗談じゃない！あんたらの『ス』だろ。俺たちがなにしたってんだよー！」

「そりだ、我々のミスだ。そして、我々に出来る、これがすべてだ。
後は君たちに任せよう」

「お、おいつ！」

田の前の光の玉が徐々に薄れていく。

「時間が来た。君たちの行く末に、幸多からん」と……」

唐突に消えた光の玉が去ったあと、一人はしばし呆然と草原に座り込んでいた。

全く意味がわからない。

ほんの一瞬前、プレイ中だった一人は、目の前が暗くなつたと思つたら、すでに全裸でここに横たわつていた。少なくとも、そうとしかいいようがない。

「ステータス」

シユウはふと思いつて、ゲームシステムの確認をしてみたくなつた。

やはり、ステータスにはアイテムガジェットしか存在しない。アイテムをすつと確認していくと、なぜだか一番下に、金貨や銀貨が入つている。

これもあり得なかつた。

所持金は普通、個人ステータスの上部に表示されている。その個人ステータスが存在しない。

「システム」

環境設定やログアウトを管理するガジェットを呼び出そうとした。しかし、全く無反応だ。

「サラさん、どうです？」

シユウは、サラにも同じ事をやつてもらつてみた。

だがやはり、お互い何をやっても、開くのはアイテムガジェットだけのようだ。

後々、このアイテムガジェットと中身だけでも、この世界では大変な恩恵だったと気がつくのだが、まだ、この混乱の中の二人にとっては、それどころではなかつた。

一通り試すことを試し終えると、一人は草原に並んで腰掛け、また呆然と空を眺めていた。

風はひどく心地いい。

若草を揺らしながら、風はなだらかな草原を駆け下りていく。ふと見上げると、うすい白い雲が、奇妙なほど速く流れていく。（こんな状況じゃなかつたら、本当に最高なんだけどな）シユウは、そう思いつつ、ちらりとサラを見てみた。

そのシユウの仕草を感じ、サラは、ついに耐えかねて泣き始めた。

「うつ…ううつ、ふつ」

訳のわからない不安さ。だが、この感覚は　　すくなくとも、この五感に感じる生々しい現実感は、一人がここに放り出された事実をなにより雄弁に肯定している。

ふとシユウは、先ほどの光の玉のように、サラまですつと消えてしまうような恐怖感と孤独感に襲われて、泣いているサラの頭を抱き寄せた。

ほんの一瞬、驚いたようにシユウの顔を見上げたサラは、今度は自分の意志でもつ一度シユウの胸に顔を埋め、声を殺し、肩をふるわせて泣いた。

「さて、じめんなさい」

サラの顔は腫れ上がりてひどいものだつたが、しばらくするとだいぶ落ち着いたのか、『えへつ』とした表情を作ると、シユウの体から身を起こした。

「ところでシユウ君、レジナレスやつてたのね

「サラさんこそ。意外ですねー」

幼なじみといつほどでもないが、お互い、同じマンショソの上下階室ということもあり、家族ぐるみで見知った仲ではある。

今どきの男の子であるシユウがゲームにハマるのはともかく、サ

ラは、これほどの美貌の女子大生だ。正直、あまり熱心にゲームにこだわるようには思えなかつたので、意外な一面を見た気がする。

「うん、学校の、友達がね、すごい娘がいるの」

サラは、仲の良い同級生に誘われて、興味半分にはじめたらしく。そこで、その友達と一緒に行動するつち、みるみるうちにレベルは上がり、装備は整い、そして、ゲームの要領をつかんでいくと、あつという間に頭角を現していったようだ。

つまり、

「ハマっちゃつたんですね」

くすり、とシユウが笑うと、サラは、むーっと頬をふくらませた。

「シユウ君は？」

「俺も似たようなもんですよ」

シユウも同級生にかなり熱心に勧められた。

まあやつぱり、評判の高いゲームだったし、シユウも人並みに興味があつた。

VRは、意外なツテを持つ父親が買っててくれた。

兄は大学進学で一人暮らしをはじめていたので、シユウは部屋にVRを設置してもらい、レジナレス・ワールドにどっぷりはまりこんでいた。

「ところで、その格好、聖騎士ですか？」

「うん。二つ名もあつたんだよ」

「えつ、それは……すごいですね」

女の聖騎士で二つ名。何となくピンと来たシユウは、

「もしかして、舞姫ですか？」

即座に浮かんだその名を聞いてみた。

「えー、なんでわかるの？」

照れくさそうに、サラははにかんだ。

「いわれてみればサラさんのイメージですし……僕にも「一つがつたんですよ」

サラに「うと

「ちょっと待つてちょっと待つて。当てるつ」

サラは眼を輝かせながら、ショウの顔をのぞき込んだ。

「黒竜殺し？」

「よくわかりましたねー」

シコウ君の今の格好

九三

ゲーム上ではお互い、分身アバターを使つてゐるから、いじり合つて名乗りあわなければ、まず知るよしもなかつただろ？

ちなみに二つ名は、特定のクエスト一番乗りの証であり、その中でも、止めを刺すなどのフラグで獲得するものだけに、強さだけではなく、チーム力や運も関わるトロフィーになつてゐる。

舞姫は、都市を襲うモンスターの大群のイベント時に、最も大量のキルを獲得した一人に贈られたはずだった。女性なので「舞姫」。剣舞のことだ。

黒竜殺しは、その名の通り、ブラックラッシュレイヤーに襲撃されたトロフィーだ。

名の称号は、一人に限ることが多い。

黒竜殺しは、止めを刺したプレイヤー限定。
だからずいぶんやつ
かまれたり、からかわれたりしたものだつた。

シユウがレジナレス・ワールドにハマれたのは、試験休みから夏休みにかけての期間だった。

休みにかけての期間だつた。

さすがに2学期が始まると、それまでのようないギルドチーム前衛でフル稼働、とも行かず、やむなくジョブチェンジをして、わずか

な時間に『生産職』を楽しむスタイルに切り替えた。一応、エスカレータで進学が決まつたシユウだつたが、2学期の

成績も無視できないため、春まで廃人プレイはお預けだったのだ。

一方、舞姫は、ほんの一週間くらい前だつたはずだ。

そう尋ねると、サラは自慢げに胸を張つた。

「イルスヴァニア防衛戦よ」

「すごいですね」

シユウも噂は聞いていた。

トップギルドのひとつ「光の楯」が、街に向かつて突進する魔物の群れに吶喊とっかんして、魔物撃滅の橋頭堡になつたという。

その中でも、舞姫は桁違いのキル数を稼ぎ、運営表彰の形で名前が付けられたという。

「もちろん、ギルドの力だけだね」

サラはいうが、そうではないだらう、それだけじゃないのはシユウには手に取るよつにわかつた。

こんな雑談でも、一人の心は、なんとか動き出せるほどには軽くなつた。

「サラさん、ちょっと動いてみましょーか?」

「そうね、状況もわからないし、出来たら、街を探したい」

お互い、同じ懸念を抱いていたようで、ほつとする。

さすがにこの状況。もしここがレジナレスだとしたら、一人つきりで野宿は、どうしても避けたいところだ。

立ち上がつたシユウは、サラに手を伸ばす。

自然な振る舞いでその手を取つて立ち上がると、サラは、またはにかみながら

「ありがと」

とシユウにいった。

とりあえず一人はあたりを見渡す。
まず今の位置に心当たりはあるのか？

「シユウ君、ここ、見覚えある？」

「いいえ、来たことない気がします」

なだらかな斜面になっている草原、太陽の位置から考へると、斜面は北から南に向かつて下つていて、反対側には森がある。
さすがに状況がわからない段階で、森にはいるのは避けたいので、
とりあえず、下つてみよう、ということになり、二人は歩き出す。

今見えている地平線は、おそらく5kmほど先だらう。5km
ということは、あそこまで行くのに1時間半くらいかかることにな
るか。

シユウは大まかに計算した。

「どうして僕が『黒竜殺し』だつてわかつたんですか？」

沈黙を恐れるように、一人は歩きながらとりとめもなく話す。

「だつて、黒衣の『侍』でしょ？」

「ああ、なるほど」

一つ名持ちは、正式サービス開始から3ヶ月で、20人くらいだ
らうか。

大体ジョブによって格好が決まってくるし、それぞれ好みの色が
あるので、そういうた情報は掲示板などでもうわざ話になつていて
する。

「それにしてもサラさん、その格好似合つますねー」

シユウは、横に並ぶサラに心からそういった。

サラはシユウより頭ひとつ以上長身だ。

そして、足も長い。シユウの腰近くにサラの股の付け根があり、微妙にシユウの劣等感を刺激する。

「ふふ、ありがとう。シユウ君も似合つてゐるよ、侍」

「ええー？ そうですかねえ」

シユウは自信がない。まあ普段袴など穿かないの何となく落ちかないのだが、そういえばずっとゲームでは袴だったな、と思つと、たほど違和感もなくなつてくるから不思議だ。

履き慣れないといえば、足袋と草履のほうがやはりまだ馴染まない。

「いつぞ、靴にしようかなあ」

シユウが愚痴ると

「ええー、ダメよー」

サラがなぜか二コ二コしながら不満を漏らす。

「だつて、すぐさまになつてるよシユウ君」

「歩きにくいし、地面平らじやないから時々痛いんですよ。」めんなさい、やつぱり靴にします

「ぶつ

サラがかわいくふくれるのを見て、シユウは苦笑しながら、ステータスを開き靴を選択する。

移動力補正のある靴はレジナレスでも人気のアイテムで、シユウもちゃんとアイテムにストックしてあるのだ。

履き替えて歩き出す。最初は単に歩きやすくなつただけかと思つたのだが

「サラさん、早足の靴持つてます?」

「あるよ?」

「ちょっと履き替えてもらいます?」

サラにも履いてもらい、様子を見る。

「うわ、これ効果あるわね……」

そうなのだ。どうやら、魔法効果の装備品は、はつきりそれと体感できるほど効果がある事がわかつた。

「ほんの気持ちですけど、楽になりましたよね」

「そうね。でもそうしたら、ネックレスとかピアスとか指輪とかも、ちゃんと装備した方がよさそうよね」

サラがふつと漏らし、憂鬱そうに顔を曇らせる。

そう近くない先に、遭遇するだらつ、魔物との戦いを思い、気が重くなつていいのだろう。

「そうですね、ちょっとこの辺で、装備をちゃんと見直しましょう」「一人は立ち止まり、アイテムを漁ることにした。

一人の所持品をあわせると、現時点で最適と思われるのは、ステータス異常回避の指輪、ゲーム内では防御力 + 10 だつた護りの指輪。魔法回避のネックレスなどが効果的だらうと思えた。

また、ショウにはないがサラはピアス穴があるので、耳に魔力增强のピアスを付けた。

腕輪のたぐいも、素早さが上がる腕輪を両腕にはめた。

また、武器防具のたぐいも見直してみた。

ショウは、侍クラスだつた頃のベスト装備だつたが、サラは、聖騎士の重装備である両手剣を使用するので、レイピアをしまい、現時点で持つ最高の剣、ドラゴンスレイヤーを左腰に佩いた。

さらに、炎属性のナイフを、右の尻あたりに邪魔にならないよう下げた。

ちなみに、ショウの装備する日本刀は、無銘ではあるが、炎属性 + 3 が付くされている。脇差にも、風 + 3 という贅沢なものだ。

装備を調べて、二人はあらためて南下を再開する。

2 時間ほど歩いたどうか、行く手に川が見えてきた。そして、舗装されてこそいいが、道も発見できた。

特に根拠はないが、ショウが

「川上より川下のほうが街の規模も大きそう

とこうと、サラも

「なるほど」

と妙に納得してうなずいていた。

そこで、二人は川沿いの道を東に下ることにした。

疲労はさほどでもないが、さすがに無飲無食で半日近く歩いているので、一人はバテはじめてきた。

「ポーションでも飲んでみますか？」

「飲む！」

予想以上にひどい味がした回復薬を飲むと、何ともひどい顔を見合させ、なぜか一人してしばらく笑つた。

そうして再び、舗装されていない荒れた道を連れ立つて歩いていると、遠くにぼんやり、人工物らしき姿が見え始めた。

人の暮らしの気配を感じるといつのは、どうしてこうも安心感があるのだろう。

だが、旅といつのは、ほつとした頃、といつのが、なぜだか悪いことが起こりやすい気がする。

村のほど近く、ちょっと先に馬車が見えたといふ、何かその馬車の周囲でただごとならない気配を感じ、二人は駆け出した。

一人の男が、馬車の左右に別れて、黒い何かと戦っている。

御者らしき男は地面に倒れ、動かない。

一人が幌をかけられた商人用の馬車から離れようとしたといつのは、中の様子はわからないが、おそらく誰かが乗っているのだ。

「…………」「…………」

一体一体の戦闘力はさほどでもないが、守る一人の男に対し、ゴブリンは40体ほどで攻めては引き、また攻める。

数で押す波状攻撃に、男たちは翻弄され、ひどく疲労しているよう見える。

装備からすると傭兵か、冒険者か。

一人一人はさほどなまくらには見えないが、とにかく数が多い上、御者をやられて逃げるに逃げられないらしい。

シユウとサラは、それぞれの獲物を抜いて左右に別れて斬りかかつた。

早足の靴の効果か、通常では考えられないほどあつといつ間に現場にたどり着く。

「フンッ！」

およそ普段とはかけ離れた裂帛の気合いを放ちながら、サラは両手大型剣のドラゴンスレイヤーを横薙ぎに一閃する。

鈍く黒い色に光るそれは、一振りで4・5匹のゴブリンを両断し、激しい血しぶきを周囲に散らしていく。

シユウも、素早い身のこなしから抜き身の日本刀を縦横に振り抜き、あつという間に7匹のゴブリンを斬り伏せている。

思わず援軍に一瞬あっけにとられた警護の男たちも、すぐに状況を悟ると、ゴブリンに伐つて出ていった。

ほんの一瞬で攻守が逆転したのを悟ると、あっけないほど潔く、ゴブリンたちは逃走を始めた。

生まれて初めて体験する血と臓物のひどい悪臭の中、シユウとサラは、こみ上げる吐き気をこらえ真っ青な顔をしながらも、襲われていた男たちのほうへ戻った。

黒い出で立ちのシユウはまだしも、白銀のプレートアーマーに白

い肌をしたサラは、返り血を浴びてすさまじい外見になつている。その様子は、助けられた男たちでさえ言葉を失い、ややもすると

彼らさえ怯えさせているように見える。

「大丈夫ですか？」

シユウが声をかけると、呪いから解かれたかのように男たちは生氣を取り戻した。

「あ、ああ。助かつた、感謝する」

「サラさん、その人見てやつてください」

道に伏せたまま動かない御者を差しシユウが「う」と

「あ、うん……」

まだ右手に血まみれの剣を握つたまま呆然としたサラは、のろのろと倒れた男に顔を向けた。

これはダメだな。シユウはサラをみて直感した。

「すいませんが、その人お願ひできますか？」

シユウは警護の男たちに声をかけると、荷馬車の中を覗き込んだ。中には、恰幅の良い商人風の男が一人、がたがたと震えながらうずくまっていた。

「すいません」

声をかけるとびくつと飛び起き、シユウを見て、また固まった。

「何か拭くものお借りできますか？」

シユウがいうと、やつと意味を理解したのか、柔らかそうなタオル大の布を何枚かくれた。

シユウはそれで顔をぬぐつたが、なかなか血糊が拭えないので、やむを得ずサラの手を引きながら河原に降りていった。

川で手を洗い、顔を洗うと、やつと人心地つけたシユウは、そのまま布を水に浸すと、サラを石に腰掛けさせ、顔と手をぬぐつてあげた。

「サラさん? 大丈夫ですか?」

「え? うん」

サラはまだ心ここにあらずといった呆然自失の状態だった。

シユウは、サラの手から剣をはぎ取ると、濡れた布で血糊を拭き取り、乾いた布でから拭きして、サラの腰の鞘に収めた。

そして、サラの顔を胸に抱きしめて、そつと耳元でささやいた。

「サラさん、終わりましたよ。もう大丈夫です」

サラはなにも答えず、ただショウの腰を力一杯抱きしめた。

「なあ、あの二人何者だろう？」

助けられた男たちのうち、右側にいた若干若い男が、左の大柄な年配者に小声で話しかけた。

「わからん」

大柄な男は、食い入るように見つめていながら、興味なさそうな声色で素っ気なく答えた。

「装備も腕も半端じゃない。だのにあれは、初陣のあと的新米みたいな……」

「わからん」

今度は明らかに不快感を漂わせながら、大柄な男は若者に振り返りいった。

「なんにせよ、俺らに取っちゃあ、命の恩人だ」

その様子は、街からも見えていたのだろう。

やがてしばらくすると、街の護衛らしき男たちが20人ほど、連れだつてこちらに駆けてきた。

彼らに紛れ、ショウとサラもゆっくり街のほうに歩みを進める。ひどい手傷だが、御者の男もなんとか命を取り留めたようで、今は馬車に運ばれ、揺られながら街に向かっている。

「おまえさんたち、何者なんだ？」

街から駆けつけた男たちのリーダーらしき貴禄のある男が、シューに尋ねた。

「あの腕前はすさまじい。なんにせよ助かった、礼を言つ」

シューは曖昧に笑いながらその礼にうなづき返した。

「すいませんが、とにかく体を清めたいし、休みたいんです。今日は朝からなにも食べてませんし、一日歩き通しで疲れてるんです」シユウは、並ぶと頭ひとつも高いサラの肩を抱きながら、リーダー風の男にいった。

「任してくれ。宿と食事、風呂の手配は俺たちです。おれはガイラス。おまえらの名前を聞いていいか？」

「僕はシユウ。」ヒーリーは、サラです

「格好からすると冒険者か？」

「訳あって旅します。特に冒険者というわけでもないんですが」「そうか。とにかく歓迎する。旅といったが、やはり王都を目指してるのか？」

「ええ、まあそうですね。急ぐ旅でもないのですが」

「勝手がわからないので、シユウものらしくらりと歯切れが悪い。

「ならゆっくりしていってくれ。よし」と、レリウの街へ

レリウは、小振りながらしっかりと外郭を持つ都市だった。人口はさほど多くはなさそうなもの、暮らしふりからそこそこの地力があるようにも見える。

シユウもサラも、この世界においては一財産といつにふさわしい金銀を持っているので、金の面での不安は、多分さほどないだろう。反対に、それらを狙われる方がよほど恐ろしい。

まあとにかく、ヒーリーの世界の様子をしばらく学ばねばならない。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シユウとサラの血まみれの姿に一瞬肝を冷やしながらも、すぐに事情を悟ったか、風呂のおりといった。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シユウとサラの血まみれの姿に一瞬肝を冷やしながらも、すぐに事情を悟ったか、風呂のおり

湯を用意しに走り回った。

女将に、誰かサラの入浴の介添えを、と頼むと、何を心得たのか、「任せておきな。こう見えてもあたしは若い頃、エルナー様のお屋敷に奉公に上がつてたんだ」と大きな胸を叩いて見せた。

サラの姿と出で立ちから、女将は、サラがやんごとなき身分だとでも思ったのだろうか。まあ問題になる誤解でもないので放つておく。

金はいくらかとシユウが聞くと、「まあ今日のところは奢おごられてくれ」とガイラスが大きな口を開けて笑つた。

人間、現金なもので、風呂に入り、身なりを整え、食事をすると、胸にわだかまつた嫌悪感より、疲労と眠気が勝つていく。

入浴中の様子を女将に聞き、また、先ほどの食事の様子を見ていたシユウは、サラがかなり参つてゐる事をひしひしと感じた。

「サラさん、じゃあお休みなさい。なんかあつたら隣にいますから」シユウはそう声をかけると、自室に戻つた。

サラの精神がダメージを受けるのはわかる。

正直、シユウにとつても先刻のあれは正直、堪えた。

手に伝わる肉を切る感覚。噴き出す血。生暖かいそれが自分の顔に、服に、手にこびりつく。さらに、あの血と臓物の匂い。

魔獸ゴブリンとはいへ、生き物の死にものぐるいの叫びと、断末魔のうめき。

寝るしかないな。シユウは布団の中で苦笑する。

ふと違和感を覚えて眼を開ける。

陽が落ちてからもどこかしら喧嘩の絶えなかつたレリウの街も、ようやく寝静まつてゐるようだ。

自分の布団の右側に誰かがいるのに気がついて顔を向ける。

そこには、しどけない寝顔をしたサラがいた。

どうしたんだろう。怖くて一人で寝られなかつたのだろうか？

ただ、シユウも今日はさすがに限界だつた。

空腹と疲労、そして緊張。

それから解放された肉体は、思考さえ許さないほどシユウの意識を睡眠へと引きずり落とす。

あれから街までずっとそうしていたように、せめて、サラの肩を

抱いてあげよう。

再びシュウは、深い眠りへと戻つていった。

「おや、タベはお楽しみでしたかね」

「……それどころじゃありませんでしたよ」

にやりと笑う女将に起こされ、シュウはゆらゆらと起き上がる。まだ布団では、サラが寝息を立てている。

「ガイラスとグレイズが下に来てるよ。あんたに話があるようだが、後にさせるかい？」

「グレイズ？」

「ああ、あんたが昨日助けた商人だよ」

「ああ……着替えるから待つてもらつていいですか？」

「あいよ」

女将は、水を張つた洗い桶に新しいタオルを置いて出て行つた。

シュウは、昨日洗濯を頼んでまだ帰つてこない羽織袴の変わりに、別の羽織袴で身なりを整え、洗い桶で顔をすすぐと階下に降りていつた。

「おはよう、シュウ」

ガイラスが、一階の食堂風になつてゐる広間のテーブルに腰掛け、シュウに声をかけた。

「おはようございます、ガイラスさん」

「おはようございます、昨日は危ないところをお助けいただき、誠にありがとうございます」

例の恰幅のいい商人、女将がグレイズと呼んでいた男が、おずおずとシュウに声をかけた。

「いえ、たまたまですし、おかげで昨夜は私たちも助かりました」

半日以上無人の草原をふらつき、食うや食わずだった一日の終わり

にしては、非常に心地よい風呂と寝床だつた。生き返つた気がする。

招かれるまま座り、シユウは、女将の心づくしの朝食を食べながら、二人の用件を聞くことにした。

「実は、シユウたちにグレイズと一緒に王都まで行つてもらいたいと思つてさ」

ガイラスはそう切り出した。

早い話が、昨日の立ち回りを見ての用心棒、ということらしさのだが、シユウは、サラの様子が気になつてあまり気乗りがしなかつた。

王都に行くのは心が惹かれるのだが、別に急ぐ旅でもないし、それよりゆつくりサラが心を落ち着かせてくれた方がよほどありがたい。

いち早くその表情を読み取つたグレイズが、困つたように目線でガイラスを促した。

「こここんところあまり魔物に出来くわすこともなかつたんだが、昨日のあの騒ぎでぞ」

「こいつがひどく不安がつてるんだ。とガイラスはいつ。

「それに、あんたらももし王都を目指すんだつたら、一石二鳥じやないかと思つてな」

まあ確かにそれはその通りなのだが。

「それはそうなんですが、僕たちも誰かと約束があるわけではありますんし、サラの調子が戻るまで、ここで休んでいたい気もするんですよ」

すると、今まで黙り込んでいたグレイズが、一いちらを窺いながら話し出した。

「で、でしたら、シユウさんだけでもいかがでしょう？」

グレイズがいうには、普段であれば、街の警備の若いのが数人で、充分まかねる護衛なのだといつ。

だが、昨日、ここいらでは数十年ぶりになる「ゴブリンの集団」での奇襲に遭い、グレイズも、護衛の面子も肝をつぶしているのだとう。

だが、人口もそれなりにあり、人の往来も活発なレリウにとつては、物流の停滞は非常につらい。

そこで、シユウやサラといった凄腕の冒険者が滞在している今、ガイラスにもう一台馬車を仕切つてもらい、2台で王都まで大量に必需品を買い出しに行きたい。

というのがグレイズとガイラスの考え方らしい。

「出立の予定はいつですか？」

「明日、あるいは出来るだけ早い方がいいのです」

少し相談します。シユウは告げると、それつきり黙つて食事を続けた。

さすがにおなかが空いたのか、サラは目前にやつと起き出しきった。

「どうやら確信犯だつたらしく、シユウの布団に潜り込んだことは全くノータッチだつた。

だつたら、明日から同室でもいいかな、とシユウは思う。とりあえず、1階のフロアのテーブルで、サラの食事が終わつたあと、先ほどのガイラスたちの頼み事をサラに相談してみた。

「また、昨日みたいな事になるのかしら」

サラの口調は静かだつたものの、明らかに気乗りがしないことは明白だつた。

「じゃあ、僕一人で行つてみよつか? どちらにせよ一度王都つてところの様子は見たいし。サラさんはその間、ここでゆつくり街とかを見ていてくれればどうかな」

「えつ……」

「片道10日くらいかかるかも知れないみたいな話だつたから、ま

あ20日ぐらいしたら帰つてこられると思つけど、いいかな?」「……

「サラはつむじてしまい、なにも話さなくなつてしまつた。

「とりあえず、気分転換に買い物に行きませんか?」「シユウが提案してみる。

「買い物?」

サラがあまり気乗りしないような口調で返すと、シユウは小声でサラに耳打ちした。

「下着、とか」

サラは真つ赤になりながらうなずいた。

小振りながらも、レリウの街は活氣のある良い街だつた。
縫製の技術はあまり良くないのか、服や肌着のたぐいはデザインも機能性も良くなかったが、一人ともそうした手持ちが全くなかつたので、ここで10着以上のストックを買いそろえた。

そもそも、VRM MOの世界では、全くと言つていいほど下着の必要がないために、アイテムとして一切持つていないので。

シユウがサラにいつたら即理解していたので女性用もそうなんだろうが、とにかく、パンツにゴムが使われていないために、使い勝手というか履き心地がひどく悪い。

裁断も、おそらく立体裁断になつていないので。上着に干渉して「ごわごわした肌触りなのが残念だ、ヒシユウは思つた。

だがまあ、ないよりはマシなのである。

その後、武器屋や防具屋を見て回つた後、まだ少し早いが、二人は宿に引き返した。

武器や防具は、めぼしいものがなかつた。そもそも一人は、この世界の常識からいつたら非常識に高性能な品々を大量にストックしているから、まああらためて買いたいと思えるほどの品がなかつた

ところのが本音であらう。

シユウたちは宿屋に戻り、女将に

「今日から相部屋にしたい」

と告げると、女将はすぐに了承した。

ベッドはツインがあつたので、そうしてもらつた。
料金のことを聞くと、ガイラスが払うと行つて帰つたとのことで、
価格のことを聞いても女将は答えようとしなかつた。

あまり世話になるのは居心地が悪いので、シユウとしては本当は
自腹で泊まりたかったのだが、やむを得ないだらう。
一人がそれぞれの部屋から移動をしているとき、女将がサラを呼
び止めた。

「ねえあんた、凄腕なんだってねえ」

「……なんでしょうか？」

「一瞬で「ブリーフ」を10回くらいこぼつせばつちを斬つちまうんだって
ね」

「……」

「つりやましいねえ」

サラは、カチンと来たのだらう。女将をにらむと、小声で呟き捨てる
ように言つた。

「何がつらやましいんですか」

「つりやましいわ。あんたはその腕での坊やを守れるんだからね
今までの、サラをからかうよつな口調から一転し、女将はしみじ
みと言つた。

「あんたちょっと下においで。お茶でも飲んで話そう

「あれ、どこに行くんですか？」

「女同士の話だよ。あんたは部屋でも付けておいで

サラと女将は、一回のカウンター奥にある厨房のテーブルに腰掛けた。

サラにお茶を勧めると、自分も軽くお茶をすすつて、女将は話し始めた。

「もう20年になるかね。あたしの旦那も、よく頼まれちゃ護衛の仕事をしてたのさ。

だけどある日、あんたらと同じようじ、ゴブリンの大群に出来くわしちまつてさ」

死体はひどい有様だつたらしい。

街の人間たちが大挙して捜索に出たものの、馬と荷は奪われ、4人分の死体が散乱していた。

「うちのなんか、頭と足がなくなつてたし、いくら探しても見つからなかつたねえ。

内臓もすっかりなくなつて、ぽつかり穴があいてるようだつたよ。食われちまつたか、どうしたもんか」

そこで女将は、サラをじつと見つめた。

「あんたは、そういう奴らと戦つてるんだ。あの日、あんたらがいなければ、あいつらは、奴らにそうされてただらつた」

「……」

サラには、とつせに返す言葉が浮かばなかつた。

「あたしにあんたの腕があつたなら、亭主を一人で行かせたりしなかつたらうね」

そういうと、女将は自分の茶碗を流し場ですすぎ、勝手口から表に出て行つた。

夕食の時間になると、再びガイラスとグレイズが宿屋を訪ねてきた。

シュウとサラを交え四人で夕食を摂りながら、明日以降の予定を話したいようだ。

「僕も王都へ行つてみたいですし、とつあえず」「一緒にしよう」と思います」

シユウはそういうと、サラを窺つた。

「私も、行きます」

何があつたのか、サラはずいぶんあつさつとそういうつた。

シユウは、不思議に思いながらも、心の底ではサラの変化を喜んでいた。

やはり、20日以上も離れるのは心配だし、なんといっても、淋しいのだ。

どんな理由はわからないが、こんな世界に突然放り出された二人だから、どこかしら共鳴している部分があるとシユウは感じている。だからこそ、出来る限り常に一緒に行動したい、とは思いつつ、でも、まだそうサラに頼むことが出来ない歯がゆさも、シユウは抱えていた。

ガイラスとグレイズはとても喜んで帰つた。

明日からは、一人にとって、新しい冒険が待つている。

翌朝目覚めると、サラはまたシユウのベッドに潜り込んでいた。洗い桶に水を張つて持つてきた女将に

「タベはお楽しみでしたかね？」

と聞かれて、シユウは

「はいはい……」

と答えた。

ガイラスとグレイズはすでに宿屋に来ていたので、サラとシュウでテーブルを囲み、朝食を済ませた。

別のテーブルには見覚えのある護衛が一人。そして初顔合わせになる護衛も一人。

つまり、ここにいる八人が、今回の道行きの顔ぶれということだらう。

食事が終わつた後、早速一台の馬車に分乗し、王都への旅がスタートした。

王都へは、このまま川沿いの道を東に下り、5日ほど行ったところにあるライダンという都市から南東に進むようだ。

このコースの良いところは、なんといっても片道10日間、野宿が一度もないということなのだ。

いうまでもないことだが、野宿せねばならない道のりというのは、それだけでさまざまなリスクを抱えることになる。

夜盗、野獣、魔獣に、もちろん自然現象さえ。

だから、一見遠回りに見えても、一度ライダンまで出るコースを必ず取る、とグレイズはいった。

それはおそらく、とても賢い判断なのだろう。シュウは思った。第一、野宿はリスクだけではない。疲労も大きいのだ。

旅においては、疲労も重要な課題になる。

疲れているとまず、ミスが多くなり、集中を欠くようになり、理性より感情で物事を判断するようになり、そして体調を崩しやすくなる。

おそらく、商人としてはそのどれもが致命的な失敗につながり得るだらう。

見た目はちょっとだらしないが、このグレイズという男、これでなかなか優れた商人かも知れない。と、シュウはちょっと彼を見直

していた。

ガイラスとグレイズという、この世界の一人の大人とよく話す機会を得られたのは、サラとシユウにとつて非常に有益だつた。

ガイラスは冒険者、グレイズは商人という立場で話してくれるというのもとても参考になつた。

そして、サラもシユウも、この世界では相当な「強者」であるということもわかつた。

「まず、あのレベルで『ゴブリンを躊躇できる』というのは、王家直属の騎士や、教会の聖騎士でもどれほどいるか」

ガイラスはいつた。

「最初の一撃で何匹か狩り上げるというのはまあ臂力ひょくりょくがあれば誰だつてやりうるけどな。あんたらは、たつた一人で何十匹の『ゴブリン』を駆逐したんだ」

「全滅させたんじゃなくて向こうひきうが逃げ出したんですけどね」
なんだか持ち上げられてるよつた感じになつてシユウは苦笑した。

まあいざれにせよ、MMO的世界の中でいつたら、プレイヤーキヤラ的な強い存在はあまり多くない、ということだろう。実際問題、あんなのがごろごろ居るRPG世界というのは、ちょっと異常なかもわからぬ。

それにしても、あの光の玉にはじめにいわれてはいたが、本当にこの世界は、リアルだとシユウは思った。

NPCとかモブとか呼ばれる存在が、一人一人意志を持つて動いている。

それは、シユウやサラにとつては、気の紛れにはなるが。

サラにとつては、ここ数日の旅程は、こんな世界に巻き込まれた自分に『納得』させるための良い機会になつた。

あの宿屋の女将の言葉は、確かに衝撃となつて、サラを襲つた。ただの近所の少年だったシユウと一人つきり、なぜこの世界に放り投げられたのかはわからない。

だが、もし シユウがいなかつたら。

サラは、見た目は頼りないこの少年のことを考える。

2才も年下で、自分より背も低くて、18歳になるのにどこか幼さがあつて、なのに『かなり』自分よりしつかりしている。

宿屋の女将の言葉で自分が戦慄したのは、

「もし、シユウ一人行かせて、帰つてこなかつたら?」
という事だつた。

初戦の様子を見る限り、確かにシユウはかなりの使い手だらうと思う。

だが、寝込みを襲われたり、だまし討ちを食らえば、どんなに優れた者でも、容易に命を落としうるだらう。

自分が彼と共にいなき状況で、もし彼が死んだら、自分はそれに耐えられるだらうか?

ここ数日、サラはシユウに甘え、夜中に彼のベッドに潜り込んでいる。

彼がそばにいなければ息苦しいほどに依存しているのだ。

それは精神的な依存であつて、おそらくまだ恋愛感情ではない。

本当にそだらうか?

彼がこの世界の他の女に、もし恋をしたら。自分と行動と共にしなくなつたら?

自分はそれに耐えられるだらうか。

それにもシユウは、ベッドに潜り込んだ私にいくらでも手を出すチャンスがあるといつて、まったく手を出そとしない。

それどころか、幼い娘をあやす父親であるかのよつて、ただ優しく肩を抱いてきたりする。

それがうれしい反面、腹立たしくもある。

この少年は自分に全く、魅力を感じていないのでどうか？

サラは、シユウの気持ちを測りかねて少しいらだつてもいる。

だが、この点ではサラも女性としてまだ成熟しきっていないのだろう。

シユウは、無意識であるにせよ、サラのこの行動　自分の布団に潜り込んでくることの真意を理解しているのだ。

だから、双方がはつきりと恋愛感情を成立させない限り、シユウがサラを女として抱く日はこないだろ？

シユウは無意識に恐れているのだ。サラと一時の気まぐれで男女の仲になつたとしても、その後、つまらないいじぎで、彼女との関係が壊れることを。

穏やかだった旅に暗雲が立ちこめたのは、4日目の午後だった。昼食を摂るために馬車を止め、護衛たちが火をおこし炊事をはじめた時に、シユウが、前方右側の森の気配に気がついた。

「ガイラスさん、サラさん」

火のそばに座る一人にさりげなく近づき、シユウは、その変化を告げた。

「困まれています」

グレイズの馬車には今、王都で売るためにレリウで仕入れた特産品が満載されている。

その一部は、途中の経由地で売却し、代わりの商品を詰め込んだりしているが、多くは、レリウの産業である乳製品や加工肉などの食料品や皮、布などだ。

つまり、魔獣にとつては、食欲をそそる香りを常に漂わせながら

獲物たちが歩いていることになる。

だが、彼らにとつて、何日か前に起きた衝撃を引き起こした『人間』がそこにいることが、ここまで彼らを襲えない理由だった。そこで、彼らは再び数に頼ることにした。

さらに彼らは『知性』に勝る仲間を引き入れることにも成功した。オークという。魔法も使え、知恵も人間に引けをとらず、そして戦闘力では人間以上の存在を。

オークは、ゴブリンの獲物が、通常の倍にも当たる物資を積み込んで旅をしている事を見抜いていた。

おそらく、よほど警護に自信があるのだろう。

だが、数日様子を窺っていたが、一行ははわずか8人。

こちらには、魔法が使えるオーク5人。それぞれが魔法のほか、弓や剣も使える。

この5人でも、あの8人を蹂躪しきれるのではないかとオークは踏んだ。

さらに、100匹を超えるゴブリンが集まっていた。

この先、ライダンを超えると、人間たちの軍隊が存在する。だが、ここで襲えば、決着が付く前にライダンから人間どもが駆けつけることは無理だろう。

オークは、襲撃を決意し、まずゴブリンに前後をふさぐことを指示した。

そして、ほかの4匹のオークに作戦を与えた。

「前後を囲まれてる。ゴブリンだな。えらい数だ」

ガイラスはいった。

護衛の男たちに火を始末させ、グレイズを馬車に避難させる。

「さて、どう戦おうか」

ガイラスは、シユウを見た。

「殲滅するしかありませんね」

シユウはため息混じりにいつた。

「馬車ではたぶん突破は難しいでしょう。

ならば、まず行く手をふさいでるゴブリンを殲滅して、そのあと馬車を進めながら後ろから来るゴブリンを防ぎながら、ライダンに向かうしかないでしょう」

「そうだな」

「ライダンにはあてになる戦力はあるんですか?」

「こっちの異常に気がつけば、100人近い兵は出せるだろ?。だが、来るまでにはかなり時間がかかる」

こちらの護衛のうち、一人には馬車の御者をしてもらわねばならない。

もう一人は、前後で先走りのゴブリンの始末をしてもらひとして、左右に残すのは、サラとガイラスになるだろ?。

とすると。

「ガイラスさんとサラは左右で馬車を守つてください。前後には一人ずつ。馬車はいつでも走れるよう、御者を付けて待機してください」

「わかった」

「サラさん、だいじょうぶ?」

「もちろん。私も一緒にいかなくていいの?」

「僕の殲滅が遅れたら、後ろから来るゴブリンが間に合わない。だからサラさんお願ひ

「わかった」

「ガイラスさんは極力、馬車の周囲を離れないでください。前が片付いたら馬車に乗つてください」

「おう、たのむ」

「じゃあ、行きましょうか」

シユウは、腰に刀を差したまま、ステータスを開いて、一降りの長刀を取り出した。

その光景を、ガイラスは茫然と見た。

「な、なんだそりや……」

シユウが取り出したのは、刃渡りが2メートルもある長刀。斬馬刀だ。

見た目こそ美しい日本刀のそれだが、刃渡りに加え、柄の部分も1メートル近くあるそれは、禍々しささえ漂う銀光を放つて、見るものに存在感を与える。

抜いた鞘だけをアイテムガジェットに戻し、シユウは数歩前方に進み、斬馬刀の峰を右肩に乗せて担いだ。

ガイラスはサラに、茫然としつつ尋ねた。

「おい、今あれどっから出したんだ?」

サラは、この世界にアイテムガジェットなどというものは存在しないことを知らない。その質問の意図がわからなかつたので、答え代わりに、自分の持ち場に歩き出した。

「なんだか、本当にすげえな」

ガイラスは、理解することをあきらめ、自分の腰にある両手剣を鞘から引き抜いた。

シユウは、前方にゴブリンの大群 およそ50匹 が集

結するのを歩きながら待つた。

そして、完全に街道を阻む形で包囲を完成したゴブリンに向かって、一気に駆けだした。

足に履く早足の靴が、人間離れした速度をシユウに与える。

ゴブリンたちが一瞬、虚を突かれた瞬間。肩に乗せていた斬馬刀を右下段に持ち替え、シユウは、立ち止まつた。

止まつた慣性を一気に刀に乗せ、シユウは斬馬刀を横薙ぎに振り切つた。

間合いに入らうとした周囲のゴブリンが10数体、その一閃で肉塊と化した。

左に振り切つた斬馬刀を返し、シユウは左手の一群に向かつて走

つた。

粗末な武器を手にしたゴブリンたちは、一瞬で目の前の光景に恐慌した。

浮き足だつた左翼のゴブリン20体ほどを、シュウは斬馬刀で刈り取る。

右翼のゴブリンはすでに潰走をはじめている。

ズシヤ。

その瞬間、激しい殺気がシュウを襲つた。

ほんの一瞬よけきれず、痛みが脳髄まで駆け上がつてきた。

「ぐつ」

とつさに右手で脇腹をさわると、服が裂け、皮膚にも一閃の切り傷が付いていることに気がついた。

「魔法使いがいるぞ！」

シュウは50メートルほど後方の仲間に叫んだ。

「オークだ！」

前の馬車の御者をしている護衛が悲鳴を上げた。

「くそつ。最悪だ」

魔法を使うオーク。それはもはや、商隊の護衛風情が立ち会える相手ではなかつた。

王軍の騎士や魔術師が一軍を編成して戦うべき相手である。

ガイラスは、全滅を覚悟した。

「ガイラスさん、サラさん、馬車に乗つて！」

シュウは斬馬刀をアイテムガシエットに放り込み馬車に駆け寄ると、指示を出した。

前後を守つていた護衛も馬車に乗せ、御者の一人に馬車を出すよう命じた。

「サラさん、一台の馬車にレジスト出来る？」

「大丈夫！」

「じゃあお願ひ」

後ろの馬車の御者台にサラを乗せると、ショウは一人その場に残つた。

背後から襲いかかると駆けだした「プリン」の一群を殲滅するため、再びアイテムガジェットから斬馬刀を取り出す。

オークたちは、目の前で起こつた戦闘を、畠然と見守つていた。だが、馬車が逃げはじめたことですぐに正氣を取り戻した。

馬車を止めるなら、馬を殺すのが手つ取り早い。

前方に一手に分かれた4匹のオークたちは、自分たちに向かつてくる馬車の馬めがけ、「ウインド・カッター」や「ファイア・ボール」の呪文を唱えた。

だが……。

サラはすでに、「レジスト」を完成させていた。

前方から飛んでくる「ファイア・ボール」と「ウインド・カッタ」を見て、ガイラスは、あと数瞬で自分が死ぬことを理解した。隣で御者をする護衛の男も同様に、あきらめに似たため息を漏らしていた。

しかし、目の前でそれらの攻撃魔法が、障壁に当たつて砕けるのを一人の男は見た。

レジストされた自らの魔法を見て、4匹のオークは冷静さを失つた。

自らの限界まで、彼らはさらなる攻撃魔法を紡ぎ出した。

馬車の周囲は、乱れ飛ぶ魔法とそれが碎ける残滓あくしで、輝くほどきらめいた。

恐怖で、馬たちはすくみ上がつていた。その中を、サラが淡々と歩いていった。

ついに、4匹のオークの魔力が尽きた。

巻き上がる粉塵^{ふんじん}と魔力が晴れると、美しい金髪の女が、自分たちに向かつてゆっくりと歩いてくるのが見えてきた。

オークたちは、今起こったことなど忘れ、あの女を征服したいと、いう純粹な欲求に捕らわれた。

あの女を組み伏せ、征服し、陵辱し、所有したい。

光り輝く白銀のプレートメイル。

手には、魔力で金色に光り輝くロング・ボウ。

彼らが心の底から忌み嫌いつつ、しかし自分らに隸属させたいと心から欲する、あのエルフ族に似た人間の女。

オークたちは、腰の刀を抜くと、サラを捕獲しようと駆けだした。ほんの一瞬前の力量差など、もはや彼らの思考からは欠落していた。

50匹のゴブリンと1匹のオークは、戦鬼のよう立っている一人の少年に殺到した。

あれを倒せば後はどうにでもなる。

みたところ、あの小僧だけがこの商隊の戦力なのだと、指揮するオークは直感していた。

ゴブリンたちが奴を組み伏せたら、それらごと破碎してくれる。

オークは、魔法の準備をしつつ、その瞬間を待った。

50匹のゴブリンたちは、無秩序にただ一点。シユウに群がった。だが、ただ一匹としてシユウに触ることは叶わなかつた。

シユウは、右足を軸に、斬馬刀を横薙ぎにして数回、回転した。

その瞬間、残つたオークは、
「ファイア・ボール」と「ウインド・カッター」を、その光景の中心に向かつて、全勢力で交互に打ち続

けた。

周囲に積み重なったゴブリンの残骸は、それらの魔法でなおも粉碎され、一帯は血潮と肉片で赤黒く染まつっていく。

流れるように自然な所作で、右手側の2体のオークの頭を、サラは射抜いていた。

サラの手にしたロング・ボウは、炎の祝福を持ったもので、射た矢が敵に当たると、ファイアボールと同等の魔法を發揮する。

サラに射抜かれたオークの頭は爆碎し、頭を失った体はそのまま崩れ落ちた。

左手の2体は、その隙に一気に駆け出し弓の間合いの内側に入り、両サイドからサラを捕らえにかかった。

サラは惜しげもなく弓を投げ捨て、腰の剣を引き抜き、迫るオークたちを呆氣なく斬り伏せた。

シユウ。

剣を振り血糊を払い、足下の弓を拾い上げると、サラは馬車のほうに戻つていった。

魔法を打ち終わった瞬間、オークは、一瞬上空に黒い影を見た。そして、それが、オークの知覚したこの世の最後の光景だった。

右手に刀を、左手に脇差を握ったシユウが、5メートル近い距離を一足で跳躍し、3メートルほど上から一気にオークを斬り伏せた。

オークの放つた火と風の魔法は、このふた振りの刃に施されたそれぞれの祝福によつて、すべて切り捨てられていたのだ。

ゴブリンの肉塊を体に浴び、眼だけが白い赤黒い姿のシユウは、刀を払うと鞘に戻し、やつとアイテムガジェットからタオルを取り

出し、顔に付いた肉片と血糊を拭き取つていった。

逃げ出したほんのわずかなゴブリンを除き、90以上の魔物が、たつた二人の人間によつて壊滅した。

ライダンには、王国兵の詰め所があった。

しつかりした城郭が街を囲む大型の都市で、門構えも鉄製のしつかりした跳ね橋になつていて、当然、堀も備えられている。

人口も、レリウの数倍はありそうな雰囲気だつた。

そのライダンの王国兵の詰め所で、シユウとサラたち一行は、オーラークとゴブリン等との戦闘の詳細を訊かれていた。

一行八人が口をそろえ、シユウとサラ一人で、5匹のオーラークと100匹前後のゴブリンを倒したと報告したので、この街の駐留軍の隊長は、彼らを異常者だと思った。

常識で考えてあり得ない戦果だし、そもそも、そのような大群の目撃情報も入つていなかつた。

もしかしたらなんらかの幻術で、商隊から金でもせしめるたぐいの詐欺だらうか？

いずれにせよ隊長は、ほかの六人は早々に開放したものの、シユウとサラは未だに、詰め所に禁足していた。

小川で身を清めたものの、まだ入浴にありつけていないシユウは、昼飯を抜いていることもあって、夕飯時のこの時間までのらりくらりとここに留められていることに腹が立つてきていた。

シユウが腹を立てているので、つられてサラも不機嫌になりつつある。

状況を確認しにいった斥候たち五人のうちの一人が、青ざめた顔で帰ってきた。

「オーラークの死骸は五匹。ゴブリンはあまりに多くて確認が出来ません。

あたりはすさまじい状態で、早急に付ける必要があると思いま

す」

斥候の言葉を聞いてもまだ信じられない隊長に向かつて、シユウ

は立ち上がりいた。

「ではこれで。用があるなら宿までお越し下さい」

宿で入浴し、やつと人心地ついたシユウは、食堂で夕飯にありつくと、先ほどまでの険はどこへやら、実ににこやかな表情になつていた。

その様子をサラは、微笑みながら見ていた。ガイラスは、やれやれ、と肩をすくめた。

サラの視線に気づいたシユウは、恥ずかしそうに笑い返しながら、おかわりした肉にかぶりついている。

「ずいぶんかかってたが、なに訊かれてたんだよ」

「いやなんにも。ただ足止めされてた感じかな」

ガイラスは心底不思議そう、「褒められこそしても、疑われるようなことはなにもないのにな」といった。

「まあ僕たちどつかに所属してるとか、そういう後ろ盾もないですからね」

そんなもんかね、とガイラスは相槌を打つたが、まあとにかく夕食はそんな感じでお開きになり、一同それぞれの部屋に下がつた。

ところで、サラとシユウのベッドはついにダブルになつた。

もうどうせツイン取つてもサラがこつちに入つてくるなら、最初から広い方がいいでしょ、といつと、あつさりサラも同意したからだ。

だが、はじめは両サイドでもじもじ寝ているくせに、朝が来るとシユウの背中にぴつたりくつついて寝てしているので、結局シユウの左手側はぎつぎつベッドの端つこという狭い有様だった。

王都まで残り五日の旅程は、これまでと打って変わつて楽なものだつた。

道の手入れが行き届いているから馬車の揺れもないし、人通りも多く、魔物が出そうな藪や林などもない。

同じ方向に向かう商隊も多いので、警護の人数も自然と多くなる。もうここから先ではまず襲われることはないだろう。

結局のところ、昨日魔物たちに襲われたのも、あれが奴らのことって、最後のチャンスだつたということなのだろう。

街道沿いには、昼食が摂れるような規模の集落もあつたりする。ライダンと次の街のちょうど中間あたりに、商隊日当てだひづ、かなり立派な食堂があつた。

「この辺で昼にしましちゃうか」

グレイズが声をかけると、一同、ほっと氣をゆるめた。今日は美味しい昼飯にありつけそうだ。

うまい飯は人の心を豊かにする。

午後の旅路に出立したグレイズの商隊一行は、しばらくすると、軽装の騎乗兵に足止めされてしまった。

「レリウのグレイズ一行か？」

「はい、そうでござります」

「護衛のシユウとサラと申すものは？」

「僕たちですが……」

「おまえらに警備隊長が話があると仰せだ。急ぎライダンまで戻るようだ」

それを聞いたシユウの顔がみるみる赤く染まつていぐ。

「僕たちには用はありません。話があるなら次の街まで来るようこそ、隊長とやらにお伝え下さい」

「貴様、逆らうつか？」

「逆らひへ。」

ギラリ、とした闘気がシユウの全身からあふれた。まるでその見えない闘気に当たられたかのようだ、騎乗兵の馬が怯えて数歩下がつた。

「何を言つているのか僕にはさっぱりわかりませんね。」

こちらは商隊の警護で王都に向かっているわけです。呼び戻されれば商売にはなりませんね。

それに、なんの用件で呼ばれているのかもわからず、いちいち引き返すことも出来ません。お聞きしますが、何用ですか？」

「し……知るか！ とにかく隊長がお呼びだ。おとなしく従つた方が身のためだぞ」

「そんな馬鹿げた命など聞けませんね。とにかく、あなたは戻つてお伝え下さい。用があるならこちらから来いと」

「き…貴様つ」

騎乗兵は、思わず腰の剣に手を伸ばした。

「いいか、抜くなよ」

シユウは、腰の刀の鯉口を切つて構えた。

「抜けばこちらも護身のために抜く。おまえのような下つ端が、國の威信を笠に着て何人かかつてこよつと、負ける氣はしない。おまえより、昨日斬つたオークのほうが、よほど歯ノいたえがあつたと思うぞ」

シユウは、位押しで威圧する。緊迫した雰囲気の中、騎乗兵の気が萎えたのを察し、シユウは構えを解いて、鯉口にハバキを收める。キン、という澄んだ金属音が、周囲の固まつたような空気を一気にゆるませる。

「いいだろう、せいぜいレイラズで首を洗つて待つておれ」と言い捨てる。騎乗兵は馬を返して走り去つた。

「おこおこ、いこのか？」

ガイラスは、今になつて吹き出した冷や汗をぬぐいながらシユウに話しかけた。

「構いません。それより、なんか雲行きがおかしくなつてきました。

グレイズさん」

不安そうに馬車から顔を出したグレイズにシユウは話しかけた。

「はい」

「この先、僕たちが一緒にいることでもしかしたら、要らない面倒」とに巻き込んでしまいかねないです。

もうあまり危険がなさそうですし、僕たちはここまでといふことにしませんか?」

「いいえ、とんでもない。わずか数日で一度も命を救われた身です。どうかお気になさらず」

意外にもグレイズは、シユウのその申し出をうけて断つた。

「いえ、やはりレイラズから別行動にします。」

あなた方は、もめ事を恐れ私たちを解雇したといえば、申し開きも立つでしょう」

シユウは一瞬考え、そう呟いて伝えた。

「僕たちは、レイラズでの連中を待ちます。もし良かつたら、良い宿を教えてください」

「まあ、じゃあレイラズまでは一緒にいり」

ガイラスがそういうことを、再び一同は動き出した。

周囲の商隊も、どうしていいかわからず立ちすくんでいたが、釣られるように動き出した。

レイラズでは、あえて一行とは別の宿を取つた。

なんらかのトラブルにまで発展した場合、同じ宿では飛び火する可能性があるためだ。

宿の前で別れるとき、シユウとサラに、グレイズはそれぞれ金貨

一枚を謝礼として差し出した。

要らないというシユウに、

「商人は貸しは作つても、借りは作りたくないものなのですよ」と、笑いながら強引に、一人の手に金貨を握らせた。

「とはいへ、今回のことでは、大きな借りを作つてしましました」「いいえ、僕が面倒だつただけですよ。グレイズさんたちをわがままに巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「じゃあ俺たちは行くぜ。シユウ、サラ。

もし、なんかあつたら、俺んとこに来てくれ。まあ鬪いじゃ全く力に慣れそうもないが、なんでも相談に乗るぜ」

ガイラスも笑いながらいった。

今まで大人數だつた夕食も、一人きりになるととたんに淋しくなる。

「サラさん、ごめんなさいね」

シユウは、ぼそつと、サラに詫びた。

「ううん、久しづりに一人つきりになれたし、いいのよ」

サラは、気に病むシユウに笑つていつた。

「わたしもなんか腹立つてたし、ね」

馬の足音が外から聞こえる。やつときたよつだ。

「さあ、どんな騒ぎになるんでしょうね」

二人は食事をやめると、傍らにあらかじめ用意してあつた得物を腰に佩いて、宿の正面から外に出た。

「シユウ殿とサラ殿とお見受けいたします。私は、ノイスバイン騎士団のアルノルと申します」

甲冑を着た偉丈夫が、店の正面に並んで立つ二人に、形の良い礼をして声をかけた。

「シユウです。こちらはサラ」

シユウも答えた。

「早速ですが、お一方には、こちらの手違いから、大変ご不快な思いをさせたようで、ライダンの者らに成り代わり、私からお詫びを申し上げたく存じます」

アルノルは、一人を前に頭を下げていった。意外な成り行きにちょっととまどいつつも、シユウは気を許すでもなく、固い口調で応えた。

「謝罪を受け入れましょ。アルノルさん」

「事情は、グレイズ殿からもお聞きいたしました。お仕事の上でも大変なご迷惑をおかけしてしまいました。そちらについてもお詫びいたします」

「わかりました。ところで、何かご用のようですが、私たちは食事の途中です。もしよろしければ、食事を続けてもよろしいでしょうか？」

再び宿に戻り店主に説明すると、主は了承してくれて、食事の続きをさせてもらえた。

同じ席を求めたアルノルを迎へ、一同は、会話をはじめた。

壁際に、アルノルの配下らしき若者と少女の騎士が、気をつけの構えで立っているのが気に触るが、気配からして今のところ害意はないさうなので放つておく。

先ほど食いつぱぐれた肉料理が出てきて、シユウはとたんに相好を崩す。

どこかしら緊張をしていたサラとアルノルも、それを見てふと気がゆるんだ。

こんな表情をするときのシユウは、ひどく幼く見える。もともと年齢より幼く見えるシユウだが、こうじてみると、まるで12・3歳の少年のようにも見えるほどだ。

「お一方にご迷惑でなければ、召し上がりながらお聞きいただきたいのですが」

アルノルは、沈黙していた方が気まずからうつと、切り出してみた。

「お願いします」

シユウは、まだ幸せそうな顔で肉をほおばりながら応えた。

「まず、我々がこちらに来ましたのは、お一方をお招きしたいと、国王から命ぜられたためになります」

アルノルが一人にいうには、早馬で状況を報告された軍務卿が、とりあえず状況を宰相に伝え、それを王が聞き、いたく興味を示したのだということだつた。

早速、そのものたちに会いたい、手配せよという話になつたのだが、ライダンの者たちの不遜な態度によつてこじれたことを知つたアルノルの部下が王都まで走り、そこで彼らがここまで来たのだという。

「なるほど、わかりました」

「お一方は馬には乗れますかな？ もし扱えるようであれば、明日、ご同行いただきたいのですが」

「サラさん、乗れます？」

「私は乗れます。シユウ君は？」

「いやちょっとわからないけど、もしかしたら大丈夫かも」
わからないというのも変な話だ、とアルノルは思つたが、まあとにかく、明日この一人のために馬を用意しよう、と考えた。

「お食事中失礼いたしました。それでは、明朝お迎えに伺います」

アルノルは、二人にあらためて礼をして、店を立ち去つた。

「いやはや驚いた、お一人さん、何者ですか？」

騎士たちが立ち去ると、主が、これはサービスだ、とグラスに酒を入れてやつてきた。

「いただの商隊の護衛ですよ」

「いやいや、ただの護衛に騎士団長が挨拶にお見えにはならんでしょう」

「えつ、あの方そんなんに偉かつたんですか？」

サラが口を挟むと、主は、得たりとばかりに勢い込んだ。

「そうですよ、の方は騎士団を統括する団長様です。騎士隊の隊長たちのさじに上。この国の護りの要のおかたです」

そうか、それは少しむ礼しちゃったかな、とショウは思った。しかし、昼間の不快感がまだ少しショウの先入観として、まだ、この国のイメージを悪くしていた。

翌朝、3人の騎士たちが早朝から迎えに出てきた。

さすがに、乗れるかわからない馬に乗つて、通常四日かかる王都への道のりに出るといつことで、ショウは、朝食はごく軽めにしてみた。

サラは普通に食べていた。たぶん自信があるのであつ。

昨晚、ショウが、馬に乗れるかわからない、といったのは、こういうことだ。

ゲーム内では、馬に乗つたことが何度もある。

だが、リアルでは、乗るどころか触つたことさえない。目の前で見たことも、たぶん一度あるかといつほどだ。

だから正直、わからない、といつことだつたのだ。

だが、意外なことに、鞍にまたがる姿からして、傍田にはショウの身のこなしさは見事なものだった。

「お、これは。大丈夫そうですね、サラさん」

「ええ……見事なものですよショウ君」

サラはおかしそうに笑つたが、そういうサラも見事な乗馬だった。

「ではお一方、参りましょう」

アルノルを先頭に、サラ、ショウ、そしてお付きの2名といつ順に、街道を南下し、一路、王都バイインスタンを目指して走ることになった。

当初は、二人に気を使つていた騎士団長も、どうやら一人の馬の扱いのめどをつけたようで、けつこう本気で馬を飛ばし始めた。馬車で残り3・4日ある距離をこの速度で行けば、馬が完全につぶれやしないか、と、ショウは余計な心配をしつつ必死で馬を御している。

見た感じ、サラが気持ちよさそうに走つてるのがショウには憎らしい。

ひとつめの街には入らず、外周を大回りした。

街を通り抜けるよりおそらく、そのほうが速いのだろう。ふたつめの街に入るとやつと、アルノルは馬の速度を落とし、通行人に配慮しながら街の中央まですんだ。そこには駅があった。どうやらここで馬を乗り換えるらしい。

なるほど、あれだけ飛ばせた理由がわかつた。

汗で真っ白になつた馬を乗り捨てると、騎士団の面々は、おそらく自分の馬であろう、そこらとは比べものにならないほど立派な馬に乗り換えた。

ショウとサラにも、駅の馬が新たに貸し出された。

王都に到着すると、一行は歩みをゆるめた。

今までとは比べものにならないほど巨大な城郭と都市。

正門からはいると、まっすぐ一直線に王城に向かつて伸びている目抜き通りの広さと立派さに、ショウは息を呑んだ。

この辺は日本の城との違いだな。

ショウは感じた。

日本の城は、城下町を形成すること自体はこのよつた西洋風の城塞 자체と変わらないが、攻め手が本丸にまっすぐ掛かれるよつた作

りにはまずしない。

見晴らしの良い道など作らないし、本丸に至るまで幾重も曲輪を用意して、適宜殲滅を謀れるよつた普請になつてゐる。

物見高く周囲を見物してゐるつち、一行は王城の門に到着した。

王城の中に騎乗のまま招かれる。右手に馬屋があり、そこで一行は馬を下りた。

厩務を担当しているのだろう若者たちが、さつと駆け寄り、それぞれの馬を曳いていく。

「お一方、大変ご無理をさせてしまい、恐縮です。これから控えの間にご案内いたしますので、どうかしばしおくつろぎ下さい」

騎士団長のアルノルはそう一人に告げると、若い二人を引き連れ、来た道を引き返していった。

代わつて、いかにも侍従らしき壯年の男性が一ひきに歩み寄つてきた。

「遠路のご来訪に感謝いたします。侍従長のクルトと申します。までは旅の埃などを落とされますようお願ひいたします」

「いんぎんあいさう」
慇懃な挨拶をされた。

正直、風呂はありがたい。汗と砂埃でごこことになつてゐるからだ。

入浴後二人は、まあ謁見ということで、最も正装に近い服を選んでみた。

とはいへ、シュウは黒衣の侍そのものだつたが、サラは炎属性の赤いフレートメイルの、兜以外のフルセットだつた。

どうせ謁見前には取り上げられるだろうと、二人とも武器を持たずについた。

しばらくすると、いつたん席を外していた侍従長が再び戻つてき

て、謁見の準備が整つたと告げた。

これが謁見の間というものだらう。

莊厳な扉が両側から衛士によつて開かれると、中は吹き抜けの天井。

幅広の赤絨毯が国王の王座の前まで一直線に敷かれ、その両側に、まず衛兵が、そして、王の近くには貴族らしき面々が起立していた。王は、一人が入つた瞬間に王座から立ち上がり、歓迎の意を示した。

一人は、侍従長に押され、王の前まで歩みを進めた。

侍従長はそこで跪きうつむいたが、別にシユウもサラも、この王国の民でもなければ貴族でもない。

日本式の立礼、つまり、お辞儀をもつて王に敬意を表した。かたわらから、その無礼をとがめるよつて、あからさまな舌打ちをされた。

「サラ様、シユウ様をお招きいたしました」

侍従長が王に報告する。

「よく来てくれた。聞けば我が臣下がなにやら無礼を働いた様子。お詫びいたす」

「シユウと申します。こちらはサラ。お招きいただき光榮です」シユウもしつと返す。

「ライダンでの働き、礼を言つ。臣民の憂いを除いてくれた功を労い、両名に褒賞を与える」

「ありがたき幸せに存じます」

横合いから、いつそ王より尊大そうな声で
「下がつてよろしい」

と声がかけられたので、一人ともほつとし、

「失礼いたします」

と、とつと退室させてもらつた。

あがたぶん、舌打ちの主だろ？。

一緒に下がつた侍従長に、しばらくして待つよつこいわれ、二人は控え室に腰掛けていた。

侍従長が退室してからしばらく経つが、なかなか戻る気配がない。早朝から馬を飛ばして午後までかかつたために昼食を抜いていることもあって、シユウはほんの少し不機嫌なのだ。

早く開放してもらいたい。

「サラ殿、シユウ殿、お待たせして済まない」

ノックも無しに反対側から飛び込んできた男には見覚えがあった。王様だった。

「あらためて、よく来てくれた。予はノイスバイン王エカルド。よしなに頼む」

さすがにシユウもこれには肝をつぶした。

「形式張つた招きをしてすまなんだ。一応、ものには順序があるゆえな」

エカルド王はにやりとわらつて、立ち上がつた一人に椅子を勧めた。王の椅子を、後ろから付いてきたのである、例の侍従長が流れるようにさつと引く。

実によい呼吸で様になつている。

二人の椅子は、王の後ろから入つてきた3人の騎士のうち、アルノルの左右にいたあの若い騎士たちが引いてくれた。一人も着席させてもらつた。

「ライダンからの経緯はアルノルから聞いた。予からもあらためて詫びよう」

「いえ、すでにアルノル団長より丁寧なお詫びをいただきましたし、

先ほども、真っ先にお言葉をいただきました。どうか

打てば響くタイミングで、シユウが応える。

「そういうていただけるとありがたい。だが、あの謁見でも、馬鹿者がそなたに無礼な振る舞いをしておつた。これも詫びよつ」

「とんでもありません。私たちの礼が、一いちらの礼にそぐわなかつたのでしよう。その気はありませんが、ご無礼がありましたらお詫びいたします」

「かまわん、そなた、名前から察するに遠い異国の方であろう。処が違えば、作法も違うのが当然だ」

これでお互いのわだかまりは、ひとまずなくなつた。

「そなたはなぜ我が国に来たのだ？　話を聞くに、仕官や商いではあるまい」

一息入れて、王が話を継いだ。

「はい。私たちは、いろんな国を旅して歩こんでここまで参りました。たまたま、レリウで魔物に襲われている商人と出会いまして、王都までの護衛を頼まれました」

「なるほど。そこで例のオークどもと出会つた訳なのだな」

「そうです。あとはご存じの成り行きです」

「今後はどうするつもりなのだ？」

「数日王都で買い物などさせてもらい、その後、旅の行き先を決めよつと思つています」

「せうか、ではこうしよう。そなたに、予から旅の手形を進呈しよう。それと、そのような事情では物など送つたところで邪魔にならう。金で褒賞を贈るよ」

旅の手形、といふことは、国境を越えるときにはなんらかの関所があるということなのだろう。これは一人にとつて、最もありがたい贈り物だった。

「それは… それは本当にありがとうございます」

シユウは、心から感謝した。

「最後にひとつ、 予から頼みがある」

「なんでしょうか？」

「ここにあるアルノルと、 一度手合わせを願えんだろうか？」

なるほど。 一人の実力を見たいということなのだろう。

断つても良いのだが、 あまりに王が嬉しそうにいうので、 つい乗つてしまつた。

「どちらとの手合わせをお望みでしょうか？」

王がアルノルを振り返つたのに釣られて、 控え室にいるすべての者の視線がアルノルに集まつた。

「……サラ殿との手合わせを所望いたします」

アルノルはいつた。

しまつたな、 躊躇しないで自分が承けると言えば良かつた。

シユウは後悔したが、 意外にも、 サラは嬉しそうに即応した。

「謹んで、 お受けいたします」

準備はわずか10分ほどで整えられた。

王は城の閱兵用のベランダから様子を見るにこしたよつだ。

サラは、 美しい葦毛の馬を借り、 アルノルは、 栗毛の馬を曳いてきた。

サラは、 例の炎属性のブレードアーマーのままだつたが、 今回は、 きちんと兜をかぶり、 髪の毛を束ねて保護している。

二人は、 どうやらジョストを行つつもりのようだつた。

ジョストというのは、 典型的な騎士の競技である。

左右に別れた騎士たちが、 一直線にすれ違ひながら、 一騎打ちで勝敗を決する競技で、 華麗で、 豪快で、 危険な闘いである。 非常に壊れやすい模造の木製武器によつて争われる。

勝負は三本。

一回戦は馬上槍。次にバトルアックスで争われ、最後に、剣で勝敗を決める。

「かまえ」

充分に間合いを取つた双方の中間に、騎士団員らしい男が立ち、勝負を預かっている。

「はじめ」

かけ声と共に、両サイドの騎士たちが一気に馬をトップスピードまでじごき上げる。

王の閲兵バルコニーから見て、右が深紅のアーマー、サラで、左が純銀のアーマー、アルノルだ。

どちらも、なんのためらいもなく馬を進めていく。

見ているこちらのほうが肝が冷える。

シユウは不安で、顔をこわばらせている。

トップスピードに達した双方は、あつといつ間にその瞬間を迎える。

ガキン！

激しい衝突音は、鎧の音だらう。

一本の馬上槍は、お互いなんの策も弄さぬまま交差し、双方が直撃となる一打を交差させた。完全なカウンターになつていたようにシユウには見えた。

1秒の間にも満たない刹那、バランスを崩し、アルノルが落馬する。

「なんと……」

王が驚きの声を上げるのを聽きながら、シユウは、ほつと胸をなで下ろした。

アルノルの許に駆け寄つた団員が、ケガのないことを確認し、再度アルノルを馬に騎乗させる。

再び左右に別れた二人は、今度は得物をバトルアックスに持ち替え、合図を待つ。

バトルアックスも木製の模造品ではあるが、馬上槍よりは頑丈に作られているため、うかつに当たれば大けがや、最悪、命に関わるほどの危険がある。

「はじめ！」

審判が叫ぶ。

アルノルは、バトルアックスを頭上で器用に回転させ威圧する。単純で、効果的なパフォーマンスだ。

対するサラは、右手一本でバトルアックスを自然に持ち、淡々と馬を加速していく。

二人が交差するほんの一瞬前にアルノルはバトルアックスを長めに持ち替え、先手とばかりにアックスを横薙ぎにふるつた。

大味なパフォーマンスの後だけに、その攻撃の鋭さは、見る者の息を止めるほどだった。

だが、サラはその軌跡を自分のバトルアックスで完全に防ぎ、そのまま押し返し、ついにアルノルの頭部に斧の刃先を当てていた。

圧倒的な力量差だ。技でもなんでもない。強引な、力の蹂躪。

落馬こそしなかつたものの、完全にのけぞつてバランスを崩したアルノルは不覚にも得物を落とし、2回戦も敗退。

最後の勝負は、剣による馬上試合。

これも木製の両手剣で争われる。

「はじめ！」

審判が叫ぶと、最後もお互い、馬を全速で走らせ、一気に剣をぶつけ合つた。

だが今度は、サラは走り抜けず、馬の速度を緩めると、後ろから一気に襲おうと企てた。

だが、アルノルも見事な手綱捌きで馬を返し、サラが届く一足前に体制を整えていた。

そのまま失速した一人は、見ほれるほどの剣捌きで、お互いの剣と競り合っていた。

だが、やはり一合一合の重みはサラに分があった。

徐々にアルノルの乗っている馬が押されていく。

サラは、動きが大きくなつたアルノルの剣を紙一重でいなす。

アルノルがほんの一瞬バランスを崩した隙を、サラは見逃さなかつた。

激しい打着でアルノルの右手を打ち据えると、アルノルが剣を落とし、ここで勝敗は決した。

07 (後書き)

2011/11/26 シェイカーさんのご指摘で、記載ミスを修正いたしました。アドバイス、ご指摘、ありがとうございました。

「両名、見事である」

試合後、再び王城に戻り、控え室に出頭したサラとアルノルは、王からねぎらいの言葉を受けた。

その後、中に金貨が詰まつた革袋を、サラとシュウは受け取つた。どちらにも、金貨が100枚ずつ入つているらしい。

その量がどのくらいの価値なのかは、まだこの世界での経済が全くわからない一人にはわからなかつたが、おそらく、かなり過分な褒賞だろう、とは思つた。

借りは作りたくない、といつて護衛して命を救つた商人のグレイズが二人に渡したのが、金貨一枚ずつだつたのだ。

ちなみに、後に二人が知るところによると、金貨5枚もあると、この世界では一家が一年、不自由ない生活が送れる程の価値のようだ。

「それでは予はこれにて。シュウ殿、サラ殿、本日はよく参つてくれた」

後のことはアルノルがよきに計らえ。
そういう残し、王は去つた。

シュウがアルノルに、城下でおすすめの宿の手配を依頼した。

アルノルは、例の若い騎士たちに何事かを命じていたので、今日の宿は安泰だらう。

「夕食まではまだ間があります。お一人は何かご希望はありますか？」

「どうやらアルノルは自ら案内役を買っててくれるつもりのようだ。
「でしたら、世界地図とか、この近隣の国の情勢がわかるような書物を購入したいです」

「私は、服などの購入が」

シユウとサラは、それぞれの希望をいつた。

「心得ました。それでは、シユウ殿は私がご案内いたしましょう。サラ殿には、城の侍従をおつけいたします。女性同士のほうがよろしいでしょう」

街に出ると、さすが王都。これまでに通つたどの街にもない壯觀な建築物が隨所に広がっていた。

人口も、大きめだつたライダンでさえ比べものにならない規模のようだ。

道行く人間たちの数でさえ、王都では、人いきれというにふさわしいほどの混雜を見せている。

スリが多いそうだ。すられてもこの混雜では、確かに捕まえるのは容易ではないだろう。

サラを案内しているのは、いわゆるメイドさんのような女性だった。

王室御用達の高級仕立て店に連れて行かれていたようだつた。

シユウは、目抜き通りらしき一角にある、書店に案内されていた。書店で書物を見たとき、シユウは、ずっと氣になつていた懸念が解消され、ほつとしていた。

どうやらこの世界に連れ込まれたときに何かしてくれたようで、文字の読み書きが出来そうだ、ということはつきりわかったのだ。シユウは、店内にある百科事典、地図、薬草事典、歴史事典、魔法事典などを手当たり次第に購入した。

そしてそれらをアイテムガジェットに手当たり次第放り込んだ。アルノルと書店主はあっけにとられてその光景を見ていた。

「シユウ殿、それは一体、なんなのですか？」
アルノルは、やつと言葉を紡ぎ出した。

「あー、えつと」

シユウは、どのように説明しようか頭を悩ませた結果、魔法といふことにじよづと思つた。

「まあ、一種の魔法の道具です。持ち物を、ある道具を使って魔法の空間に閉じこめます。開いたときに取り出せるようになります。店主とアルノルの目の前で、実際に世界地図を取り出してみせる。そして、また仕舞つてみせる。

二人は、理屈はわからないものの、仕組みは理解したようで、いたく感動していた。

書店主は、やたらとほしがり入手法を聞こうとかなり頑張つていたが、実際は、シユウたちにとつてはゲームに付いていたただのアイテム機能にしか過ぎないので、全くわからなかつた。

「いや、まあ秘匿を条件に譲られたものですので、私たちにもよく解らないんですよ」

そういうことにしておいた。

金貨5枚ほどの書籍をシユウは買いあさつた。

次はどこに行きたいか、とアルノルが尋ねるので、シユウは、そういうえば、と思い立つて、

「鍛冶道具の店に行きたい」
とアルノルに頼んだ。

「ここが工具屋です」

アルノルが案内したのは、本当にいかにも工具の店、というべき、乱雑な道具屋だった。

工具の店というのは、シユウにとつてはどんな店でも本当に心が躍る。

なぜなのかわからないが、シユウは子供の頃から、文具屋や工具

屋、ホームセンターのたぐいが大好きで、何時間商品を見ていても飽きなかつた。

だが、鍛冶屋道具を扱う店に来たのにはちょっとした訳があつた。ゲーム中に身につけたスキルが、今のところ全部使えている。ならば、冒険ギルド引退後にやつていた『鍛冶屋』が出来るのではないだろうか？

と思い立つたのである。

この世界の武器は、やはり使つと劣化する。刃こぼれもすれば、折れたり曲がつたり。

そうしたものを鍛え直したり、研ぎ直せれば、まあちょっと便利かな、と思つたのだ。

結局、砥石や工具類一式。紐やら針金やら革などの原材料。針や糸などを大量に買い、またアイテムガジェットに放り込んでおいた。「それはどれくらい収納できるのですか？」

アルノルはその光景を見て、またうらやましそうに尋ねてきた。

「さあ、試してないんでわからないです」

シユウは答えた。

アルノルの見たところ、ここや本屋で買ったものは、もう優に一部屋以上の大荷物になつてゐるはずだった。

それらを魔具に収めてるとはいえ、もし重量があるなら、生半可な重さではないだろう。

だが、本当にわからないシユウは、聞かれても答えようがないのである。

「後は、日用品や旅の道具が欲しいんですが、それはサラさんたちと合流してからでいいですね。アルノルさん、馬車つて買えますかね？」

「もちろん。私でよければ、よい馬を見繕いましょつ。馬車は、中古であればすぐに手にはいるでしょつ。どのような馬車をお望みで

すか？」

「商人ではないので、荷馬車は必要ありません。どれだけ値が張つてもよいので、寝泊まりに耐える馬車と、それを引ける馬が欲しいです」

「となると、旅芸人が使っているような馬車がよいのでしょうか。わかりました」

馬と馬車はこちらで探しておきます。とアルノルがいつので、シユウは好意に甘ることにした。

荷物は実際はアイテムガジェットに収納してしまえばいいので、馬車は寝泊まりが出来て、雨露をしげたらよいのだ。

あまり野宿はしたくないが、万が一、ということはあり得るのだから。

サラは、かなり服を買い込んだらしい。

既製服を数着、季節に応じてなん揃えも買い、更に、さまざまなドレス類を、オーダーメイドで注文したらしい。

ついでにシユウの分も、ということで合流後、シユウも採寸をされた。

服 자체はもうサラとメイドさんが必要なデザインを伝えてあるらしく、採寸のみで開放されたのはありがたかった。

ホームセンターや文房具好きのシユウは、ファッションショッピングは苦手なのである。

その後、サラがどうしても見たいといつ「魔法」の店に行つた。魔法は、固有スキルで自然に覚えるものと、呪文を購入して覚えられるものがあった。

だから、もしかしたら魔術書を買って学べば、呪文が増やせるかも知れない、とサラは考えていた。

先の戦闘で、シユウが「ウインド・カッター」によつて傷つけられたのを、サラは重く受け止めていた。

シユウは魔法が使えない。であれば、魔法が使える自分が、シユウの分も魔法を自在に扱う必要がある。
聖騎士として、直接攻撃と僧侶系の回復魔法、防御魔法が得意だったサラだが、可能であれば攻撃魔法も覚えようかと考えていたのである。

魔術書は、ゲームのそれとは違い、使い捨ての消費アイテムではないようだった。

だとしたら、一人分でも各一冊ずつで事足りるだろう。
ということで、サラは、店主に、店内にあるすべての魔法を一冊ずつ欲しいと告げた。

サラとシユウ以外の一同は驚いた。そんなことをすれば、むろん金額はすさまじいことになるが、量も半端なものではあるまい。
だが、アイテムガジェットがあるからまあ大丈夫だらう、とサラもシユウも思つていた。

魔術書はおおむね高額だ。その理由は、もちろん希少性や利幅の面もあるのだが、根本は、すべてが手書きによる模写だということだろう。

文字の模写は、まだ根気があればなし得るが、図の模写は、才能と、時間と、労力を要求される。

結局、魔術書は350冊、金貨1800枚にも及ぶ買い物になつたが、サラはアイテムガジェットから1800枚の金貨を取り出し、350冊の魔術書を淡々とアイテムガジェットに放り込むと、ついに全部収納しきつてしまつた。

ここでも魔法屋の店主にすいぶん質問攻めにあつたが、シユウが前と同じ説明をして煙に巻いておいた。

服の仕立ては全部で10日ほどかかるらしい。

その間にシユウとサラは手分けして、野宿の際に必要になる調理器具や調味料、保存食料や、中古で買った馬車の修繕、馬車の内装や寝具の購入といった準備を粛々とこなしていった。

調理器具や家財道具はすべてアイテムガジェットに放り込んだので、見た目ほど馬への負担は厳しくなさそうだったが、そうはいつても、馬車自体がけつこうな重量になる。

そこで、アルノルは、頑丈そうな重種馬を二頭選び出していた。騎士が乗っている馬は、シユウたちが知っているサラブレッドに近い馬のようだった。

軽種馬と呼ばれる馬は、500kgぐらいの体重が平均的だが、重種馬は、体重1トンを超えるような大型馬になる。力は強いが足はさほど速くない。

すべての準備は3日ほどで整つてしまつたので、結局服の仕立て上がり待ちとなってしまった。

その間二人は、馬の馴らしを行つたり、本や魔術書を読んだりして過ごした。

馬は、アルノルの紹介で雇つた馬丁が驚くほど一人によく懐いた。特に、シユウへの懐き方は、馬丁がその才に嫉妬を感じるほどだった。

ガイラスとグレイズの商隊が王都に到着した。

二人は、王都についてからサラとシユウの噂でもちきりだったのでも、取るものもとりあえず駆けつけてくれたらしい。

「まあ、悪いことになつてなくて安心したぜ」

4日ぶりにあうガイラスは、苦笑しながらサラとシユウに握手を求めた。

「いろいろな噂が駆けめぐつてますね」
「グレイズも笑いながらいった。

魔獣退治や王からの褒賞もそつたが、やはり一番の話題は、サラの魔術書の「大人買い」だつた。

まとめて1800枚もの金貨で350冊もの魔術書を一括して買ったサラは、その姿もあって、「どこの王族のお忍びではないか?」と噂されていた。

となれば、シュウはそのお付きの従者である。

その話を、ガイラスとグレイズがおもしろおかしくするので、サラはすいぶんご機嫌になり、シュウはちょっと落ち込んでいた。

シュウの落ち込み方がおかしくて、囲む3人はますます喜んだ。

「せめて姫の騎士とかならまだなあ」

シュウは嘆くが、やはりシュウの格好がどう見ても騎士ではないため、異国の従者にしか見えないのだろう。

本人たちは気づいていないが、実は、口が達者なシュウがいつも、交渉ごとや雑談に応じていることも、シュウが従者だと見られる原因ではある。

お姫様は、微笑むだけで無口なものなのである。

「でも、シュウ君が従者だつたらわたくし、道ならぬ恋の逃避行もよろしくてよ?」

「こいつはごちそうさまだ」

そういうつて3人はまた盛り上がりつていた。

ガイラスとグレイズは、その後3日ほどしてレリウに向けて旅立つていつた。

帰りも荷の多くなる一行のため、レリウまでの護衛を捜して回るガイラスや、レリウや途中の街で仕入れた荷物を売りさばき、帰りの便で必要になる日用品の仕入れに走り回るグレイズに、シュウはずつとついて回つた。

生々しい商人同士の戦いは、シュウには大変学ぶところが多かつた。

別れの日、ガイラスはいつものように磊落^{らいらく}にシュウとサラに別れを告げたが、グレイズは眼を真っ赤に腫らし、別れを惜しんでくれた。

「いつかまた、こっちに訪れることがありましたら、是非私たちを訪ねてください」

グレイズは二人の手を取ると、名残惜しそうに馬車に戻つていった。

「……いい人たちだったね、シュウ君」

見送る馬車が人混みに紛れた後、サラは、そういった。

服の納品も済み、最後の食料品の買い出しも終わると、サラとシユウは、最後の別れに王城に出向いた。

騎士団の控え室にアルノルを訪ねると、彼もまた、旅立つ二人に名残惜しそうに別れの言葉をかけてくれた。

しばらくすると、まあ王城内ではあるが、王もお忍びで別れに来てくれた。

「これが約束の手形だ。まあ友好国ではそなたらを守るであろう」手のひら大の、頑丈な鉄に、純金のメッキが施された、非常に贅沢な手形だった。

そこには

ノイスバイン王である

エガルド・サリガル・アデラル・ノイスバインは

以下の両名の友に対し

身分を個人的に保証する

サーラ・ヨハンセン

シユウ・タノナカ

その要があれば隨時
ノイスバインに照会を許す

貴国における両名への配慮を求める

と記され、その下には、王のサインの打刻と、王家の紋章のレリーフが彫り込まれている。

貴族でもなんでもない二人にとって、この贈り物がどれほど彼らを護るのか、計り知れないのは容易に想像が付く。

「ありがとうございます。この恩は忘れません」

二人は、はじめてあつたときと同じように、王に立礼した。

二人が去つた後、アルノルはふと、王に漏らした。

「惜しいですね。この国に留まってくれば」

「詮なき事よ。お前を破つたあの少女だけであつたなら、あるいは予の臣下に加わつたやも知れぬが……」

王は、騎士団の控え室から立ち去りながら、アルノルにいった。

「あの少年は、英雄の風がある。到底、予では扱えまいよ」

だからこそ。

エガルド王は、『友』などという、国王が使うには大それた呼称で二人を遇したのだ。

二人は、シユウが買い込んだ地図で、やっと自分たちの現在位置を把握した。

いわゆるゲーム開始直後の起点になる『始まりの街』レオナレルは、この大陸 レジナレスのほぼ中心にある。

シユウはそこから南西に、サラはそこから北西方向にクエストイベントをこなしつつ進んだため、南東にあるノイスバイン王国については、ほぼ名前さえわからない状態だった。

とりあえず一人は、旅の目的地をレオナレルに定め、馬車を進めることにした。

王都から西に4日、小都市サスデオまでは、毎日宿のある順調な旅で、二人は、観光気分で旅路を楽しんでいた、のだが。

ああ、ナビが欲しい。

サスデオから旧街道を北上し、次の村で一泊、と考えていた二人は、どうやら道を間違えたのではないか？という状況に置かれていた。

なんせ、未舗装の道には雑草が生え始め、どうやらもう数年は、ここを人が通っていないのではないかと思われる風景になってきたのだ。

ここから引き返してもどうせサスデオに着くまでには夜までには間に合いそうにない。

ならばもう少しだけ進んでみて、ダメだったら、野宿しよう。

一人はそう話しあい、人気のない荒れ道を北上していった。

目の前にその村が見えてきたのは、もうすっかり日も暮れて、空がわずかに青紫の光が残るほどの時間だった。

「廃村かな？」

「……廃村ね」

村には全く明かりが見えない。

いつも、まだ草原などのほうがマシだらう、といつくりここに、無人の荒れた廃村というのは、精神的に来るものがある。

「しょうがないから、今日はここで一泊しませんか？」

ショウはそういうが、サラはかなり保護欲をそそられる瞳で、恨めしそうにショウを見つめている。

上田遣いできらきら光る責めるような瞳で見られたところで、そろそろ馬を休ませてあげないと、ヒショウは思っている。

いずれにしても、この状態で動き回る方がよほど危険だとも思う。

「では、ここを今日のキャンプ地としまーす」

ショウは、言い切って馬を止めた。

村の中心は石畳になつていて、今は枯れているが、昔はここに共同の水道でもあつたのだろう、という遺構が残っている。建物の荒れ方からしたら、ほほ数年は無人になつているのではないかと思われる。

ショウはカンテラをアイテムガジェットから取り出し、ちょっと見て回るうかと思い、サラを誘つたが、

「いや、ぜつたい、いや」

と、強い口調で拒否された。

馬車の中は明るいし、春真っ盛りの今の季節なら本当に過ごしやすいので、とりあえず、王都で買った結界の魔法石で馬車を包み、ショウ一人で付近を見て回ることにした。

ショウは、馬屋があつたらしいな、と考えているのだ。

馬という動物は、大食いだ。草食といつこともあるのだが、やはり大柄な肉体を維持するために、大量の飼い葉と水を必要とする。

今までは、宿の下働きにチップを与えることで、ずいぶん楽をさせてもらつてきたが、いつなると、自分で何とかしなくてはならぬのだ。

付近をいろいろ見て回ると、元は宿屋だったらしい建物の裏手に、干し草が残った馬小屋があるのを発見した。

シユウは、その干し草を一抱えほど抱きかかえると、アイテムがジユットに放り込んで馬車に戻る事にした。

それにしても、なぜここには廃村になったのだろう。

見た感じ、どの建物も古いし荒れてはいるが、火事や災害といった原因で破壊されているとは思えない。

人為的に壊された跡もないのに、おなじく住民は、一斉にこの村を離れたのだろう。

考え事をしながら馬車に戻ったので、うつかり結界石の解除を忘れてしまった。

激しい警戒音にシユウは驚いてあわてて結界石をとめると、おなじくおそる馬車のまゝに振り返った。

半べそをかいているサラが、泣きながら怒っていた。

「バカつ！」

「……ごめんなさい」

「でもサラさん、何がそんなに怖いんですか？　お化けとかそっちですか？」

さらはびくつと肩をふるわせた。図星か。

「サラさん聖騎士でしょ？　祝福とか解呪の魔法使えるんじゃないですか？」

「それはそうだけど……トライアマのよ」

VRMMOは比較的、グロ・恐怖表現には厳しい規制があるので、RPGではやはり若干、そうした表現が含まれる。

スケルトンやゾンビ、ゴーストにリッチなど、死霊や死体そのもののモンスターも数多く存在する。

おそらく、そのあたりが苦手なんだろうなあと思われる。

「でも、お化け系出たら僕は全く役に立ちませんよ?」

シユウは侍なので、剣士系スキルばかりである。

まあ、退魔系の剣もあるにはあるのだが。

アイテムガジェットから干し草を出し、馬の前に山積みする。飼い葉桶に水を入れたいのだが、ここは水路が枯れていって、どうしたらしいかわからない。

そういうえばいくつか井戸もあつたようだが、こんな状態の村の井戸など、怖くて使いたくない。

「サラさん、たとえば、魔法で水とか作れませんかねえ?」

「出来なくもないかも。ちょっと待つて」「

ゲームで身につけてる呪文は、攻撃などに使うものばかりなのだ。サラはアイテムガジェットの中の、ほほ魔法ライブラリとでもいうべき量の魔術書から、初級魔術の本を引っ張り出し、ただの水を出すウォーターという呪文を読み始めた。

シユウは、枯れた水路に飼い葉桶を二つ用意し、サラの呪文を待っている。

「よし、じゃあやつてみようか」「

サラがもによもによ呪文を唱え、
「ウォーター」と唱える。

「どばー。」

シユウのふくらはぎあたりまであふれた水で、彼は下半身水浸しの目にあつていた。

「もう少し、加減を覚えましょ?」

「じめんなさい……」

とりあえず2個の飼い葉桶に水をなみなみ入れると、馬たちの前に置いていく。

シユウは、とりあえず靴とズボンを履き替えると、それぞれ簡単にすいで、馬車の後部の壁に干しておいた。

この頃シユウは、王都で買いそろえた普段着をよく着ている。侍の装備である羽織袴はやはりこの辺では目立つし、けつこう洗うのに気を使うので、何着か普段着を買い込んだのだ。

やはり、シャツにズボンのほうが楽だといったのもあって、もうすつかり見た目は、サラの従者である。

「シュウ君、魔法覚える気はないの？」

馬車の中で食事をしていると、サラが不意にそんなことを言い出した。

「ない訳じゃないんですけど、もともと、パラ全く振つてないですかねえ」

実際は、キャラレベルも高いスキルレベルでも自然と魔力値は上がるのでも、全く素養がないわけでもないが、シュウはボーナスを素早さや強さに極振りするのが好きだったので、あまり魔法については考えたことがなかった。

戦闘はギルドのメンバーと共同して行うのみだったので、全く必要がなかつたということもあつた。

「でも、せつからくだから少し覚えた方がいいですよね」

強力な回復・防御・解呪などの僧侶系スキルをサラが持つているとはいえ、現状たつた二人の旅だ。

防御魔法や回復は最低限覚えておきたいな、とシュウは思った。

「じゃあ魔術書、時々貸してくださいね。勉強してみます」

とりあえずは、ヒール系とレジストやプロテクト系かな、あ、ウオーターやただのファイアとかも便利そうだ。シュウはそんなことを考えた。

食事も終わり休み支度をしていると、村の南側から、いやな気配を感じることにシュウが気がついた。

馬が時折鼻を鳴らしていることから気がついたのだ。村の外の草原で、ざわざわと何かがうごめく気配があるのだ。

「サラさん、夜襲されるかも知れません」

サラは気がついていなかつたのか、何かいいそうなつたので、しつゝと、口に指を当ててシュウが続けた。

「感じでは『ゴブリンっぽいですが、暗いんで何とも言えません』先ほどまで月が出ていたのだが、どうやら雲に覆われてしまつたのか、今は、馬車の窓から漏れる光が届く範囲がうつすら明るいだけ。

「サラさんは馬を守つてもらひますか？ もし攻めてきたら僕が一人で対処します」

シユウは、外していた装飾品を身につけ、使い慣れた刀を用意して、馬車から静かに降りると、気配のした南側に回り込んだ。

サラも、スカートの普段着からズボンと白銀のプレートアーマーの上部だけに着替え、ドラゴンスレイヤーを腰に佩いて、そつと馬車前部の扉から御者台に移る。

南側の村はずれから、ついに動き出した物音がはっきりと聞こえてきた。

シユウは炎の魔力石を取り出し、南の道沿いに投げつけ、爆ぜさせてみた。

急激に明るくなつた周囲に、敵の姿が浮かび上がつた。

「オーガだ！」

シユウは、サラに届く声量で伝えた。
この村が廃村になつた理由はわかつた。

オーガが巣を作つたのだろう。

ゲームでは比較的序盤に巡り会うオーガだが、小型のゴブリンに比べると、2メートルを超えるような巨体に強い筋力を持ち、武器も重量級のアックスや棍棒、時には人から奪つた槍やモーニングスターなどを使つてくる、一撃をこちらが食らえばやつかいな存在だ。この暗闇の中で、夜目が利くのか、明かりをもたずくに集結してきていた。

一瞬の光で見えたのは5体。

だが、仲間を呼ばれていれば、どのくらい来るかわからない。

シユウは、刀を抜いて、考える。

よし、とりあえずアレは全滅させておこう。

オーガたちは、一瞬激しく燃え上がった炎で、暗闇になっていた目をつぶされていた。

再び目が効くようになった瞬間、目の前に自分たちの獲物だと思っていた人間が抜刀して立っていたのに気がついた。先頭のオーガはその瞬間に、首を切られていた。

殺気に反応して一気に散開したのは、オーガにしては出来すぎだとシユウは思った。

こいつらは、たぶん人を襲い慣れている。

向かって右手にいつたオーガをシユウは狙った。

相手の気配はわかるが獲物が判断しづらい。

とにかく、一撃でも食らえばこっちの命が危ない相手だ。間合いぎりぎりでシユウは2匹目のオーガの足を狙った。

「グオー！」

痛みのために奇声を上げるオーガがとっさにしゃがんだところで、こいつも首を刎ね上げた。

さて困った。暗すぎてシユウにはあまりにも不利だ。

さらに一つ、炎の魔法石を取り出し、いまオーガたちが居ると思われる場所に投げてみる。

ひとつは思惑通りオーガに当たつて燃え上がる。

だがもう一つは、何もない土の上に落ちて燃え上がった。

後ろ！

棍棒を振りかぶつて今までシユウを殴ろうとしてるオーガを、下袈裟に切り上げる。太った腹の皮を左下から切り裂かれたオーガは、はらわたを吹き出しながら崩れ落ちた。悪いが止めは刺してやれない。

火を消そうともがく一体を除き、おそらくどこかにもう一体。居所がつかめない。シユウは、はじめてに近い恐怖の冷や汗を全身に感じていた。

どうする？ 家を燃やすか？ とにかく明かりが欲しい。せめて、あとわずかでも目が効けば。

ジャリ、足音が聞こえた。

たぶん一息ではシユウに届かない間合い。助かつた。シユウはその瞬間、一気に加速し、ひどいやけどを負っているオーガを左肩から斬り伏せ、アイテムガジェットから一振りの槍を取り出した。

斬馬刀は鞘を抜く間に間に合わない。

この瞬間生死を分けたのは、月にかかつていた雲が切れたことだつた。

残り一体のオーガに思つたより間合いを詰められている事をとつさに悟つたシユウは、右手の刀をそいつに投げつけた。オーガの右手に刀が突き刺さるが、死にものぐるいのそいつは、なりふり構わず棍棒を持ち替えシユウを狩りに来る。棍棒の長さと槍の長さ、ほんの30センチほどが勝負を分けた。オーガの棍棒はシユウの鼻先をかすめて外れた。シユウの槍は、オーガの心臓を貫いていた。

ほつとしたのもつかの間、道沿いに、たいまつを持つ何者かが近づいてくるのが見えた。

20は軽くいそうだ。残念ながら、援軍ではあるまい。

シユウは、斬馬刀を取り出し、鞘から抜くと、その鞘を格納する。やむを得ない。月が晴れている今を逃せば、もうあの数のオーガには勝ち目がないかも知れない。

馬車に近づかせれば、敵に広い場所をとる、一歩もはさむべき弱みが増える。

ならば、このまま突撃するしかない。

斬馬刀を右下段に持ち、シユウは一気に走り出す。オーガたちもそれを察し、縦長に歩いていた列を崩し、取り囲もうと散開していく。

最初の一閃で目の前の5匹のオーガを斬った手応えがある。だが、まだ残りは10匹以上いるだろう。

右足を引き、もう一度右下段に戻る。

左後ろに散ったオーガが、シユウに向かつて棍棒を投げつけた。よけきれず、シユウの左肩から背中にかけて、手ひどい衝撃を食らった。殴られるよりいくらかマシだが、呼吸が止まるほどのダメージをうけ、シユウは一瞬前のめりにふらついた。

その隙を突こうと、一斉にオーガが襲いかかってきた。

「オオオー！」

周囲を揺るがすほどに激しい気合いがシユウの喉をふるわした。その瞬間、萎えかけていた全身の筋肉が力を取り戻す。

不自然な姿勢から力任せに繰り出す斬馬刀の一閃。

さらに、背後に回つてシユウに棍棒を投げつけたオーガに対し、斬馬刀で突きに入る。

腹に切つ先が食い込んだ瞬間に、刀をこじる。肉をえぐる感触が手に伝わった瞬間に、刀の重さを活かして一気に斬り下げる。

「ギュオー！」

苦悶の叫び声がオーガから上がった。

残りは5匹。

修羅のような形相のシユウは、自らの痛みを超える興奮で体を動かす。

肉体の限界に近い運動を全身に強いる。

数歩で間合いに入つたオーガを、斬馬刀の一振りで斬り捨てる。

右から左に振ったため生まれた隙を突こうと槍を振り下ろすオーガに対応するため斬馬刀をそのまま捨て、脇差を抜いて、そのオーガの槍を紙一重でかわし、左に流しながらオーガの腹を割く。

そこで振り返ると、その脇差を、最後のオーガに投げつけた。

脇差は、最後のオーガの腹にそのまま刺さった。

アイテムガジェットからまた一本、槍を取り出し、そのオーガの首を突き貫いた。

そのまま槍を放すと、最後のオーガは、そのまま硬直し、後ろに倒れた。

くそ、身動きが出来ない

少し力が入つただけで、激しい痛みが背中を走る。

まだうめき声を漏らすオーガがいる。

止めを刺したいのだが、もはや体が動かない。

月が完全に姿を現した。

南に延びる荒れ果てた街道に、巨大な氣をまとった何かが現れるのをシユウは悟った。

ゆっくりとした足取りで近づいてくる巨大な獣。

月光にきらめく銀の体毛。

「銀…魔狼」

4つ足の状態でも、シユウの身長ほどもあるつか。酷薄な殺氣をまとつて、ゆっくり、シユウのほうに近づいてくる。

銀魔狼。他者の命で生きながらえる、食物連鎖の頂点に間違いなく君臨するだらう魔獸。

レジナレス・ワールドでは、特殊ボス扱いだつたらうか？存在は知られていたが、攻略はされていなかつたらう「伝説」級の化け物が、いま、シユウの目の前にいる。

こちらに向かつて歩きながらも、好奇心に満ちた恐ろしく賢そうな双眸を、シユウに向けて光らせる。

黄金色のその瞳は、わずかな光を受けて、闇の中でグリーンゴールドに輝いている。

ただ歩いていてもあふれ出るような殺氣は、その歩みの美しさ、一切無駄のない華麗な狩獵者のハントが完璧であるとの裏付けだ。姿を隠し、相手をだまして命をかすめ取る必要など何もない、王者の矜持だらう。

ほんの一瞬体重を沈め、銀魔狼は跳躍した。

ああ、食われるのかな？

シユウは茫洋とその光景を見ていた。

ガフツ！

銀魔狼に首を噛まれたそれは、断末魔の叫びさえ上げることを許されなかつた。

頭を食いちぎられたそれは、見苦しきはいざり回つっていた肉体を、そのまま一瞬痙攣させて止まつた。

ペッ。

銀魔狼は、不機嫌そうに噛みちぎつた頭をはき出す。

そして、そこにいる黒髪の少年を見下ろした。

そして、ゆっくり、口を開いた。

『坊や。詰めが甘いのう』

銀魔狼は、シユウの襟首をくわえて、ゆっくり立ち上がった。無理矢理つるされたことで、シユウの顔が再び激痛にゆがむ。そのままゆっくり、シユウをくわえたままの銀魔狼が、街の中へ入っていく。

その光景を、茫然としながら、サラが見つめている。

銀魔狼はそつとシユウを地面上に降ろすと、サラに向かつて言い放つた。

『小娘、何をしておる。さつさと癒さぬか』

「……！」

サラは、硬化の魔法から解き放たれたようにシユウの元に走り寄り、くヒールをかけ続けた。

ちらつと銀魔狼に視線を移す。

一瞬その巨体が揺らいだかと思つた瞬間、目の前に、唐突に全裸の美女が現れた。

長く美しい銀色の髪が、月の光を受けて美しく輝く。

抜けるように白い肌は、完璧に整つた魔性のプロポーションを持つている。

背丈はサラよりほんの少し低い。だが、恐ろしいほどの威圧感が全身からわき上がつている。

そして、その瞳は美しい黄金の輝き。間違いない、あの銀魔狼だ。

「小娘、我に服を貸すがいい。何をしておる？」

サラがアイテムガジェットから取り出した服を、銀魔狼は当たり前のように受け取ると、慣れた手つきで身につけていった。

おそらく、人に化けるのははじめてではないのだろう。サラは思つた。

「坊や、気がついたか」

「……あなたは」

サラがシユウの身を起こすのを手伝つ。

「お前らが銀魔狼と呼ぶ狼よ」

銀魔狼は愉快そうに喉を鳴らす。

絶世の美女でありながら、そのわまは明らかに、肉食獣そのままだ。

「助けていただきましてありがとうございます。僕はシユウ。こつ

ちはサラ」

「お前らなんぞ坊やと小娘で充分だわ」

「はあ…」

「お前のせいでおーがの頭なぞ口に入れてしまった。口直しをよこせ」

銀魔狼は唐突に言い出す。

宿屋に泊まるつもりだった二人は、今日は干し肉くらいしか持ち合わせがなかつたが、意外に喜んで食べているので、つい持ち合わせをすべて献上してしまつた。

「ところで、お名前を教えてくださいませんか?」

シユウは狼に聞いてみた。

「名など無いわ。だが、坊やが我につけたいといふのなら、貰つてやつてもよいぞ」

「そういわれましても……うーん、じゃあジルベルとか?」

「ジルベルか、どういう意味だ?」

「えー…銀色つて意味です」

「よからぬ。その名を貰つてやる」

銀魔狼 ジルベルは、そつこつと、シユウの右腕を取り、おもむろに噛みついた。

そして、そこから流れ出る血をすすり飲み、口を離した。そして、自分の右腕をシユウの前に差し出した。

「さあ、飲め」

「は?」

ジルベルは、右手を一度引っ込めるど、自分で一の腕を噛んだ。ブクリと血の玉が浮かび出て、一筋、ツーつと流れ落ちた。

「さあ、飲め」

よく解らないが、仕方なくシユウはその血をひとすくい、舌で舐め取つた。

「先ほどの鬪氣、未熟者の小僧なれど見事であった、坊や。我的つがいと認めよう」

「は？ つがい？」

「ちょっと！ なに勝手なことをいってんですか！」

茫然とこのやりとりを見ていたサラが、二人の間に割つてはいつた。

「私はそんなの認めませんよ！」

「なんだ小娘、今見ていたであろ？ 坊やは我に名を~~下~~え、我が血をすすり、我に血を~~下~~えた。つがいの成立であろ？」

「説明もしないで無理矢理やらせたんぢやないですか！」

「では聞くが、小娘に何か迷惑でもかけるのか？」

「……」

サラは、本質を突いた逆ねじを自然に返されて、言葉を飲んでしまつた。

「ではよいではないか、なあ、坊や。いや、我がつがいとなつたからには、坊やはまずからう。シユウと呼んでやるゆえ、我に名を呼ばれるにふさわしいオスとなれ」

「は、はあ。頑張ります」

「なにシユウ君も受け入れちゃつてるのよ！ そこのは~~否~~定すぬといろでしょ？」

がば、サラはシユウの頭を抱きかかえ、ジルベルに高らかに宣言した。

「し、シユウ君はあたしのものなんだからー。」

しばしの沈黙が三人の間に流れた。

一人の女性の間に流れる激しい殺氣にすっかり当たられて、シユウは固まってしまっている。

「小娘」

「…何よ？」

「本来我らは、つがいをオスとメスの一対一とするのが習わしだ」「私たちもそうよ！」

「そうではあるまい。人の子らは、優れたオスであればメスの群れを囲いたがろう」

確かに、この世界ではそうだろう。

現代社会から来たサラにとつては、到底受け入れられない提案だが。

「ゆえに、小娘がシユウとつがいになりたいといつのであれば、認めてやらないこともない」

「ふざけないで！」

「ふざけてなどおらん。小娘、威勢がよいのはけつこうだが、我が何者か忘れたのか？」

ジルベルはゆっくりと服を脱ぐ。

サラの普段着のワンピースを羽織つただけのジルベルは、全裸になると、すぐに力を解放させた。

目の前に、巨大な銀狼が姿を現す。

「小娘、お前などその気になればいつでも食い殺せるのだ。だが、シユウとお前には確かに絆があるようだ。であるなら我は、我らの有り様を曲げてもお前を受け入れようといつておる。気に入らぬのであれば、力の限り奪い合つ以外になかろう」

激しい殺意がジルベルの体からあふれ出てきた。

サラも、ひどく暗い殺意をみなぎらせた目でジルベルを見つめている。

「あのー」

気の抜けた声を上げて、にらみ合つ両者の中間にシユウが割つてしまつた。

「ちょっとお話を急ぎますので、まずは私の話をしていいでしょうか？」

シユウはそういふと、ゆっくり両者を見つめた。

「お一人の気持ちはありがたく思います。サラさんにもジルベルさんにも僕はとても助けられていますし、恩があります。なので、まずは一人が殺し合つてもらつては、本当に困ります」

シユウは、ジルベルに向かつて、

「まずは、出来ればもう一度人間の姿を取つていただけますか？」

といふ、サラに向かつて

「とりあえず、座つてください」

といった。

ジルベルも再び人の姿を取ると、脱ぎ捨てたワンピースを着て、傍らに座つた。

「まず、僕とジルベルさんが、知らなかつたとは言え、儀式をしたところのは事実です」

「うむ」

「サラさんと僕が、一人で助け合い、今まで頑張つてきたのも事実です」

「うん」

「サラさんが僕を、ええと、そういう意味で『好き』だというのは、今まで知りませんでした。いえ、嬉しいですよ？」

サラの眉が片方つり上がるのを見て、シユウはあわてて付け加える。

「ジルベルさんが僕を助けてくれた意味が、そういう意味だとはわかりませんでした。光栄です」

「うむ」

「でしたら、とりあえず、サラさん、もしつがいになるなら、お二人とも、ということでいけませんか？」

じりやらこかないらし。サラの田は再び、怪しく光る。

？
たには どちらとも一かしにならなし どういのにしかかつずか

今度は、ジルベルが冷たく微笑みだした。

「困りましたね。そしたら二股男の僕は、死ぬしかないですね」

今度は、シエウかにせりと笑つた。

「あ、とりあえずしばらく二人で旅してみてはどうでしょうか？」

した。 次に、 いじふら思ひでいが、 いじふらに悪性を崩して言ひだ

「あんまりいきなりな話なんで、全員ちょっと泡食つてしまいましてが、よく考えたら、まだみんなよく知り合っていないわけですし、もしかしたら、サラさんとジルベルさんも、仲良くなつたりするかもわかりません。

「ああ、どうあがへず、ひとまづつがいとかどうかとこうのは隠りこのまつに置いておいて、まづ一緒に旅をしてみませんか？」

「よかア」

二者二様の沈黙を破つたのはジルベルだつた。

二者の視線に耐えかねて、サラもやむなく首肯した。

「よがつた、しゃあひとます」の話は終わっていいですね？」
今日はちょっと限界です「僕も

サラはやつと、シユウが先ほどまで大げがをしていたことを思いだして赤面した。

翌朝までは何事もなく過ぎていった。

シユウの状態は昨夜よりひどくなっていた。

筋肉痛や肉離れ、打ち身などは、当日より翌日の症状がひどくなることは珍しくない。

シユウの背中は棍棒を当たられた跡がはつきり赤紫に腫れ上がり、彼は寝返りさえ打てないような状況になっていた。

ポーションを飲んでみたがあまり芳しくない。

サラはしばらく、魔術書を読みふけつていたが、得心したように魔術書を閉じ、シユウに向かって、新しい魔法を使い始めた。〈ハイ・ヒーリング〉である。

みると、変色した打ち身の部分は癒されて、健康な肌色を取り戻してゆく。

「ありがとう、サラさん。楽になりました」

「今日はまだ寝てて？御者は私がやるから」

サラはシユウをそつと寝かしつけると、扉を開けて御者台に座つた。

その後ろを、ジルベルがついて行つたのを見て、シユウは再び眠りについた。

「サラ。昨夜の我的態度は傲慢であつた。詫びよつ」

ジルベルはサラにいった。

サラは少し驚いた顔をしたが、

「もういい

とつぶやいた。

「今のお前の治療を見て、私は感心したのだ。我ではシユウの痛みを除いてやれなんだ。お前がいて、良かつた」

「私はあなたをまだ認められない。でも、あなたがいなかつたら、シユウは今頃どうなつていたかわからない。だから、私もあなたにお詫びします、ジルベル」

サラも、小さく頭を下げた。

「でも、まだ納得いきません。私だけのものだつた男を、半分奪われるような気持ちには、どうしても蓋が出来ません」

「昨夜も言つたが、我らの種族も、本来オスとメスはひとつがいなのだ。お前の言い分はよく解つておる」

ジルベルもうなずいた。

「だが、我もまた、シユウに魅せられてしまったのだ。昨夜のアレの働きは、実に見事だつた。あのオーガどもは、我が眷属の巣穴を襲い、皆殺しにして、肉を食らい、奴らの住処に毛皮を干しておつた」

ジルベルは、忌々しそうにつぶやいた。

「我はあの日、奴らを皆殺しにすべくあの村まで出向いた。そこで、奴らを圧倒するシユウを見た。人間ゆえ、真つ暗闇で奴らを見失いながらも、見事な腕であった」

ジルベルは続ける。

「アレは多勢に無勢ゆえに手傷を負つた。我はそこで助けに入ろうかと思った。だがアレは、すさまじい闘気を発し、自らの体の限界まで力を振り絞り、再びオーガどもを制圧していった。我は思わず、見惚れてしまつていた」

ジルベルは、サラをじつと見た。

サラははじめて見る、殺気のない、真剣なジルベルの表情に息を飲んだ。

「アレが止めを刺さなんだオーガが一匹、卑怯にも音を隠して、アレを殺そうと近づいておつた。だから、我が助けた。助けねばアレは死んでおつた。

助けたからには、アレは我のものだ、そう思つておつたが、サラが居らなんだら、アレは昨夜命を落としておつたやもわからん。

だから、我はお前を認めた。サラよ

ジルベルは、しばし返事を待つた。サラからの返事はなかつた。

「それだけだ」

旅芸人の馬車は、多量の荷物を運ぶために、箱の柱が頑強で、屋根も太い梁が細かく渡してある。人間なら5・6人が乗つても、抜けることがないほど丈夫に作られている。

ジルベルは、御者台からはしごを伝つて、馬車の屋根の上に登ると、そこで寝ころんで空を眺めた。

良き伴侶を見つめたと思ったが…ままならぬものよ。

ジルベルはそのままそつと目をつぶり、つかの間の休息を取ることにした。

ショウが日をさましたのは、サスティオに馬車が着く手前だつた。日中ほほ寝ていたことになる。

体がずいぶん軽い。サラにかけてもらつた「ハイ・ヒーリング」>がずいぶん癒してくれたのだろう。

布団から起き上がり、体をひねつてみる。

どうやら、肋骨にはダメージがなかつたようだ。

ショウは、馬車の前扉から御者台に出ると、

「サラさん、ありがとうございました。代わります」といった。

「うん……」

サラは、ずいぶん疲れているようだ。おそらく、休み無しに走つてきたのだろう。

ジルベルは、屋根の上にいる。僕に気を使つたのか、それとも馬車が窮屈なのかな？

ショウは、そんなことを考えながら、サスティオに向かつて馬車を進めていった。

サスティオの街に着いた。

一行はまず、例によつて王国兵の詰め所に行き、北の廃村で一件を隊長らに話した。

ショウがジルベルから聞いておいた話を総合すると、まず、廃坑の跡に盗賊たちがたむろしだし、そこを狙つてオーガが攻め入つて、そのまま居着いた、ということになるようだつた。

そのオーガが村を脅かすようになつたので、どうせすでに鉱山も失い寂れた村に残つていた人たちは、新たに西側に移住して、一から村を作り直した、ということのようだつた。

それをそのまま隊長に伝えた上で、昨日、知らずに廃村で野宿し

たこと、オーガに襲われこれを殲滅したことを伝えておいた。

さすがにライダンでの一件とその後の王からの触令は心得ているようだ、殺したという25匹のオーガの数に驚いてはいたが、隊長たちは丁重に一行をもてなしたものだった。

一行はとりあえず、今夜はサステオで一泊。その後、ジルベルの服や保存食糧、塩漬け肉など、旅の人数が増えたために必要な買い出しを済ませ、再び北上の旅に出発した。

なぜ廃村のほうに出でてしまったのかの謎は解けた。

「こちらだの」

どう見ても側道にしか見えない分岐で、ジルベルは左折を示した。長年馬車が通つた旧道は、道幅も広くしっかりした作りになつているのに対し、まだ2・3年しか経つていない新道は、通行量が少なく、まだ本格的な道に見えないのだった。

サラに聞かれると怒られそうなので言わないが、シユウにとつては、ジルベルと出会えたというだけで、死ぬ思いをしたあの日には価値があつたと思っている。

サラとジルベルは、恋敵であると同時に、旅の仲間でもあるという難しい関係なのだが、シユウが寝込んでいる間に何かあつたのか、表面上は波風立てずに過ごしている。

一体シユウの何がジルベルのお気に召したのか、シユウ自身にはさっぱりわからない。

だがまあ、あれほどの力を持った存在が仲間として同道してくれるのであれば、心強いことこの上ない。

あとは、サラとジルベルが折り合いをつけてくれたらな、とシユウは思う。

全く男女のこと経験のないシユウにとって、この状況は青天の霹靂だった。

今まで見たこともないほどの怪しい魅力をたたえたジルベルと、

同じマンションの『近所さんとしてよく見知つていながらも、特に親しくしていたわけではない美少女のサラ。

サラに関しては、『お忍びの王女では』などと謳われるほどの容色なのは間違いない。

つまり、一個の男として、どちらの女性だけでも、もし共にすることが出来ればそれは幸福な一生といえるほどの容姿であり、才能をもつた人たちだと思う。

だが、ショウはそのどちらとも関係を深めるわけにはいかない状況になつていて。

ショウも、健康な青少年である。それは、性的な興味も人一倍あるし、これほどの女性たちに求愛されれば、普通であればどちらか片方でも手に入れたいと願つて不思議ではない。

ショウが曖昧に濁しながらも双方を抱えていきたい理由はただ単に、一步間違えれば命を落としかねないこの世界で、とにかく生き延びたいがためであつた。

サラに対しては、一緒にこの世界に連れてこられた同志、とこうの側面のほうが、今は大きい。

5日ほど北上したところで、ノイスバイン王国と隣国、ヒルゼルブルツ王国の国境の間にたどり着いた。

国境には、それぞれの国が管理する関所が砦のようになびえていて、今はどつかわらないが、波乱のあつただらう両国関係をうかがわせる。

それぞれの関守にノイスバイン王から賜つた手形を見せると、なかなかに靈験あらたかであつた。

書類作成や荷台の検分などでなかなか通してもらえず、袖の下などを通してやつと通過している商人たちの一群を尻目に、三人の馬車は、最恵待遇で通り抜けてしまった。

田指す『始まりの街』レオナエルまでは、関守によると、あと20日ほどの道程らしい。

ヒルゼルブルツに入つて2日目の朝、関所から最初の宿屋街を出たあたりで、シユウたち一行は、不自然に距離を開けながら同じ距離を空けて付いてくる商隊の存在に気がついていた。

ヒルゼルブルグの王都はここから南下。シユウたちは北のレオナエルに向かい山沿いの小街道を行く。

後ろから付いてくる商隊は、馬車4台。明らかに不自然だった。

昼に休憩を取つたとき、後ろから来る商隊のうち、3台はシユウたちの馬車を追い抜き、残り1台は、シユウたちがぎりぎり見えるあたりで止まつた。

今日は、あと四時間ほど進むとあるらしい農村で宿を取る予定だから、少しゆつたり休憩を取つていた。

やがて、一息ついて出発した一行は、荒れ地に広がる三叉路を、標識通り、今日の目的地、アンセリ村に向けて右に進路を取つた。

「さて、まあ思つた通りの展開になりましたよね……」

シユウはため息混じりに、サラとジルベルに言った。

「ずっと匂つておつたからのう」

銀魔狼であるジルベルは、耳と鼻が桁外れに鋭い。

朝方からつかず離れずに彼らを追つていた人間どもの匂いを、ずっとかぎ分けていたのだ。

もちろん、奴らが話していた声もずっと前から聞こえていた。

「よお、兄ちゃん。わかつてると思うが、ここで死んでもらうぜ」
オーガを一回り小振りにしたような身なりの悪い男が、薄汚れた無精ひげの顔に、野卑た笑いを浮かべている。

前方に放射状に停められた馬車から、手下らしき男どもがわらわ

らと、20人くらい降りてきた。

後ろの道でも、例の一台だけ遅れていた馬車が道をふさぐように止まり、そちらからも6人ほどが、獲物を手に降りてくるのが見えた。

実は、もう道行きの途中で、3人はこの件について話あつていた。シユウとサラは、出来れば人間を殺すのだけは避けたいと言つていたが、ジルベルに一喝されていた。

「お前ら、人間と魔獣、どう違うというのか？」

命があるといえばどちらだつて命があるし、生きるために生きて命があるといえどどちらも相違ない。

害意があるのも変わらないし、自分や大事なものを守るために、相手を殺さねばならない事情は、全く同じだ。

ジルベルが言つるのはおおむねそういうことだつた。

それは、サラにもシユウにもよく解つている。

それが、この世界だ。

いや。

サラやシユウがいたあの現代社会でも、実際はそうだつたのではないか？

たとえば、彼らが知らないどこかで誰かが、自分たちの代わりに、人間同士で殺し合つたり、護りあつたりしていたのではないか。そう思つた。

どちらにしても3人は、襲われたら容赦なく、殺し尽くそう、そう確認して、ここまで来ていた。

サラもシユウも、覚悟は、出来ている。

これから、人間どもを、殺す。

ジルベルは、人間どもを殺すのに狼の姿など必要ない、といつていた。

しかも、武器も防具も必要ないといふ。

「この腕のみで充分よ」

ジルベルは、ニイッと、その美貌を残虐な笑みで崩した。サラは、例の炎属性のロングボウを用意していた。人間相手ではオーバーキルかも知れないな、ヒシュウは思ったが、いつそ、その方が良いのかも知れないと考え直した。シュウはいつもの通り、腰の一刃に、斬馬刀だ。

山賊どもは、もはや完全にこの3人を舐めていた。真ん中の王族にも見える女の得物は弓だつた。これは、盾を持った数人で挟み込んで無力化したらしい。あつちの銀髪の美人は丸腰だ。逃がさないように押さえ込めば事足りる。

残る男は、防具も着けず、剣も見慣れぬ細い剣がふた振りだ。長槍で三方向から刺せば片が付くだろう。そう値踏みを終えていた。

この山賊どもは、奴隸攫いひとさらいもある。

一人の女は、かつてないほど高く売れるだろう。馬車の中身もそこそこ期待が出来そうだ。

今荷馬車に転がして持っている、山賊人生で最高の「おたから」とあわせ、この儲けで、もう俺は一生遊んで暮らせるわな。

山賊の頭は、そう、ほくそ笑んでいた。

「とりあえず、僕らに手出しするのやめてみませんか？」
シュウは、無駄だとわかつて一言を口にした。

「命乞いかい？」

どんな集団にも、こういう軽薄な口を叩く奴がいる。

そして、こういう奴に限って、仲間の背中の後ろにいる。

「わかりました……」

シユウはため息をつくと、アイテムガジェットから、すでに抜いて用意してあつた斬馬刀を取り出し、山賊たちの三台の馬車から飛び出した連中の前に立つた。

斬馬刀は、右肩に峰を置き担いで歩く。

ジルベルは、後ろで通せんぼをしている6人のほうに、気楽にことことこと近づいていく。

サラは、自分たちの馬を守るため、馬の前で、弓を構える。

「すいません。手加減は出来ないんですよ。皆殺しにさせただきます」

「ほぞけ、小僧！」

この集団で一番強そうかな?と思える大男が、両刃剣を片手に、こちらに走り出してきた。

その後ろから、3人の男たちが、長槍を持って従つてくる。

サラが、弓で両刃剣の男の頭を射抜く。

炎の爆発が収まった瞬間、男の頭部は爆散し、首から大量の血が噴水のように噴き出していた。

「まずい、あの女！」

山賊は、自分たちの見込みが甘かつた事に気がついた。あわてて総掛かりで包囲を狭めていく。

長槍の3人の男たちは槍を水平に持ち、一気にシユウを突き殺そうと三方向から迫つていった。

山賊にしてはよく統率が取れている。もとはどこかの軍で従卒でもしていたのかもわからない。

だが、流れるよつに肩に担いだ斬馬刀を右下段に遷したシユウは、股を大きく割つて、一気に斬馬刀を左に薙いだ。

男たちの槍の上を一閃した斬馬刀は、男たちの首、顔半分、そして肩から上を両断に切り裂いていた。

その想像を絶する酷むごたらしい仲間の死は、残酷な山賊たちをして恐怖に震え上がらせる。

その後ろから、顔色ひとつ変えずに、サラは弓を連射している。サラの矢は、鎌が誰かに当たるたび、当たった部位が吹き飛んで、人間の体に大きな穴を作っていく。

サラは自分から見て右手側から、一人一人、順々に、確実にしとめていく。

だが、そのサラの矢を止めるべく彼女に向かつて殺到してくる山賊どもは、その場から一歩も動かないシユウの斬馬刀の、銀色の旋風の餌食になつていく。

特に、射を封じようと全身盾で迫ってきた3人の山賊はまとめて一太刀、シユウの斬馬刀に盾ごとまつぶたつにされていた。

後方であつけにとられていた山賊どもは、石づぶてや弓矢を、一気にシユウに浴びせかけた。

「プロテクションウォール」

サラが一詠唱でシユウの前に、魔法の物理障壁を展開する。

シユウにとんできたすべての矢・石は、その障壁に当たり、シユウの足下にパラパラと降り注いだ。

その瞬間、シユウが一気に山賊どもの許に走り込み、斬馬刀で、残らず命を刈り取つた。

最後にシユウは、山賊の親玉の心臓を斬馬刀の切つ先でひと突きし、90度えぐつて引き抜いた。

「ば…け…も」

親玉はシユウを睨みながらうつめ、三度ほど胸に開いた穴から血

を吹き出し、死んだ。

「僕からしたら、あんたらのほうが人間じゃない」
シユウはどこか、言い訳じみた独り言を漏らした。

こうして、この一方的な虐殺は、幕を閉じた。

ジルベルが無防備に6人の山賊に近づいたため、山賊どもは武器も手にせず、素手で確保しようと歩いていった。

ジルベルは、その6人が周囲に集まるのを待つて、ほんの一瞬で全員の首の骨を、両手で一人ずつ、握りつぶし、折り曲げていった。わずか数秒で、山賊が作った「通せんぼ」は壊滅した。

山賊たちの馬車には、10人ほどの男女、わずかばかりの財宝や衣類が残されていた。

男女は下着も含めはぎ取られ、手足を縛られていたので、まずは全員の縛めをほどき、服を選ばせた。

その中に一人、ひとりわ美しく、この環境の中で肌に汚れひとつ浮かべていらない長身の女性がシユウの目を惹いた。

エルフ。その中でもやはや人というよりほぼ精霊というのに近い、ハイエルフの女だった。

彼女らの種族は恐ろしく性欲がうすいと聞く。だからだろうか、全裸であることを全く意にも介さず、最後まで衣類を取りにも来ないで、一心にシユウを見つめている。

その様子を見たサラは、自身の顔を醜悪にゆがめながら、その女に衣服を手渡した。

だが、衣類は手に取つたものの、全く動く気配さえ見せず、女は

ただ、シユウをじつと見つめている。

どうやら、また一 波乱起きそつな 気配である。

奴隸として売られる直前で開放した者の中に、土地勘がある女性がいたのは助かつた。

とりあえず、当初の目的地だったアンセリ村に向けて、一同は出发することにした。

山賊どもの死体は放置することとして、4台の馬車はひとまず持つていくこととした。

自分たちの馬車はサラに任せ、一台をシユウが、残りを、解放者で馬が扱える者に任せた。

サラの横に座つた地元の女に案内させ、日暮れにはなんとかアンセリに到着することが出来た。

村の若い衆に事情を話し、とりあえず今日の宿と食事、風呂を手配してもらつた。

村に駐留している村役人は、彼ら10人の宿泊費などについて非常に苦々しい顔をしていたので、

「彼らの費用は全部僕たちが見ますよ」と、村人に伝えた。

村人たちは喜んだが、村役人も大層喜んでいた。

食事と入浴が終わると、元奴隸商品の一団は、宿の一階に集められた。

そこで、呼び出した村役人も含め、今後の対応を話あつておいた。まず、馬車に残された金品の所有者の確認など、村役人にたのんだ。

そして、わずかばかりのお見舞いとして、シユウとサラが手持ちで持つている銀貨をかき集め、一人あたり20枚ずつ手渡した。

彼らは、元の生活に帰るにせよなんにせよ、いざれにしても路銀が必要になるだろうからだ。

そして、村役人には手形で自分たちの身分を明かし、北に旅するので、何かあれば連絡をしてくれ、と言い残した。

そして、殺した山賊たちが身につけていた装備や、懷の中身などには一切手をつけていない、と、シユウはあえて言葉にした。

その瞬間の村役人の表情を見て、彼の奥底の人間性をかいま見た気がした。

だがまあ、これで山賊どもの遺体の始末はこちらにツケが回つてくれることはあるまい、と、シユウはこっそりほくそ笑んだ。

山賊退治の帰りに道案内をしてくれた少女と連れだって、小柄で頑丈そうな男がやってきた。

「私たちを召し抱えていただけませんか？」

二人は、貴人に対する平民のような片膝着き礼でシユウたちの前で頭を下げ、そう話し出した。

「いや……僕たち見てのとおり危ない旅してるし、今のところ自分たちのことは自分たちでやってるからね」

さすがに、冒険者じやない者たちは、いざといつとき足手まといになりかねない。

だが、目に涙をためつつ必死に訴える一人の話を聞いていて、シユウは、これはやむを得ないかなあと思つていた。

二人は同じ村の幼なじみで、こうした田舎ではよくあることだが、同じ親族同士らしい。

人口が50人程度の村ではかなり血縁が濃くなるから、まあそうした関係なのだろうとシユウは思つた。

それで、その村なのだが、例の山賊どもに襲われてほとんどの者が殺され、村は略奪し尽くされたということらしかった。

売り物になりそだとこの二人は拉致されたので、結果として生き残ることが出来たというわけだ。

今更村に帰つても生活のめどが立つわけでもなく、かといって、

頼る当てなどどこにもないし、仕事といつても、下働きが出来るかどうかといった事情らしい。

聞けば、ほかの者たちは皆旅人や商人だつたらしく、ひとまず帰るあてはあるようだつた。

「仕方ないですね、明日までにちょっとと考えておきます。今夜はゆっくりお休み下さい」

とりあえずそういうて、一人を部屋に帰した。

そして、最後の問題に取りかかつた。

ハイエルフの女性、クリステルは、救出されたあとずっと、シユウが見えるところに居続けている。

そして、話し合いが終わつて一同が解散したあと、シユウの部屋に訪れて、今後のことについて話したいと言い出した。

この部屋にはサラとジルベルが同室している。

まあ別に聞かれても困りはしないだろうと、クリステルを招き入れた。

うわ、この人も近くで見ると足が長いなあ。

シユウは、胴長短足の日本民族である自分をちょっと残念に思つた。

大体において、人化しているジルベルですら、自分より身長が高く、足が長いのである。

あらためて、クリステルを見やると、この女性もまた、恐ろしく美しい事にあらためてシユウは気がついた。

昼間は全裸だつたこともあるので、極力見ないようにしていたので、僨い印象しかなかつたのだが、こうしてみると、意外にも肉感があるなどらかな腰からヒップにかけてのラインも美しいし、サラ

ほどではないが、歩くたびにたてに揺れ自己主張する胸元も、薄着であることもあって、男の目を釘付けにするだけの威力を誇る。

サラの金髪とはまた違つ、あわいシャンパンゴールドの髪は、光に透けると白く光り輝く。

耳は、人の耳よりほんの一回り大きい程度で、先端はどがつているが、さほど人との違いは感じない。

瞳の色は、うすい灰色に近いシルバー。おそらく、色素の量が少ない一族なんだろうなとシユウは考えていた。

「すいません、こんな狭い部屋なんで、ベッドにおかけいただく事になりますが」

一応四人部屋なのだが、狭い部屋に無理にダブルベッドを一つ置いたような構造の部屋なので、とにかく狭い。

シユウの横にサラが座り、ジルベルの横にクリステルが座つて対面したが、この四人の間を人が通り抜けるのは難しいくらいに狭かつた。

「それで、お話とは一体、どのような内容でしょうか？」

シユウが切り出すと、クリステルは、はじめてふつと恥じらうような表情を浮かべながら、シユウだけを見つめていった。

「わたくしを、シユウさまの側妻そばめとしていただきたく、お願ひにうかがいました」

ああ、やつぱりこいつ話になつたか。シユウは向かいに座るジルベルを見た。

ジルベルはおおかた予想が付いていたのだろう。人の悪い笑みをサラに向けてニヤニヤ笑つていた。

そつとサラを盗み見る。

表情の抜け落ちたような冷たい顔をしているが、瞳だけは強くクリステルに向けている。

だが、クリステルは、そんなサラに一顧だにせず、嫣然えんぜんと柔らかな微笑みに羞恥を含ませながら、シユウをじっと見ていた。

人生で、集中してモテる時期がある。というような話を聞いたことがある。

これまでの18年的人生で、おおよそモテたことのないシユウにとって、ここに来てからのこの状況は、もはや自分のことではないような劇場感というか、リアリティのない状況に思えていた。

「お断りいたします」

シユウは即断した。

「それは私が他種族だからでしょうか？ それとも、なにか私に不都合でもございますでしょうか？」

断られてもまったく意に介していない風で、さらりとクリステルは言つて返す。

「いいえ。私の問題です。

まず僕は現在、この二人の女性から求婚されていて、それを保留させてもらつてゐる状態です。その上女性を増やす事は考えられません」

「それはいかがでしょうか？ わたくしは、妻にしていただきたいとは申し上げております。あくまで、側妻の一人としておそばに置いていただきたいとお願いいたしております」

「同じ事です。サラさんは、なんというか、一夫一婦の暮らしを望んでいますから」

「ジルベルさまは違うのですか？」

「我はまあ、人の子らの性さがというか、強いオスがメスを囲うのを知つておるから」

「まあ。それではわたくしも、ジルベルさまに賛同いたします」

「なんであなたたちはそつなの？」

サラは声を荒げた。

「むしろ我も聞きたい。サラよ、なぜお前はシユウを一人のモノにしたがるのかの？」

「それが男女の当たり前の姿だからよー。あなたの種族でもそうだつて言つてたじゅない」

「お前らの種族では当たり前ではあるまい。むしろ、シユウほどのおスであれば、優れた子種を次代に残すためにも、多くのメスを孕ませる必要があると考えよ!」

「……」

「我らの種族は多産だからなの!。ところで、お前一人で背負いきれるのか? こんな世界ゆえ、子など失うは^{たやすい}。お前は淡々とたくさん子を宿し、ただ育てていくだけの女になれるだらうかの!」

「子供など、考えたこともありません!」

「そうか、それはすまなんだの」

「サラさま、ジルベルさま。承知いたしました。それでは、私は側妻についての申し出は控えさせていただきます

「ほう、よいのか?」

ジルベルは、愉快そうにクリステルを見つめる。

「ええ。わたくしはエルフですので」

「おお、なるほど。では我もそれで構わぬかの」「どういう事よ?」

サラは訝しげに一人に聞いた。

「わたくしたちは、あなた様が女の努めを終えたあとも、今のままの年格好でありますよ? あなた様が天寿を全うなさつても、おそらく今の見た目のままでいることでしょう。当然、」[」] も

そういうてクリステルは、自分のお腹を撫でる。

「ですから、あなた様がどうしても、シユウさまを独り占めなさりたいというのであれば、わたくしはただお側に置いていただけるだけで構いません」

「それならシユウ君も同じ事でしそう? 私とシユウ君は一つしか違わないのよ?」

「それは違うの!。シユウは我的血を受け入れ、我的守護を持つ。もし我的命をシユウに流し込めば、シユウは今のまま、幾百年にわたりて生きられよう」

「シユウさまが望めば、私どもの氏族にも、そうした秘技がありま

すので、エルフと共にあるお方として、数百年、一緒に生きる事も可能です」

サラが真っ青な顔をしてうつむいてしまったのをみて、シユウは、ついあえず話を収めるべく、話を切り出した。

「とにかく、今日はこの辺にじょう。ところで、クリステルさんは、戦闘は出来るのですか？」

「ええ、こう見てもわたくしは、世界にあこがれ、ふるをとを出た女ですから」

クリステルが言つには、彼女は、弓や剣も扱えるが、精靈魔法の使い手だと言つことだった。

魔法使いが増えるのはありがたい。

その能力から、どうしても防御に回らざるを得ないサラのバックアップとしても、もちろん、攻撃側の意味にとつても。

「わかりました。僕にもちょっといろいろ考え方させられるべきものがありますけど、とにかく、ご一緒にいただけるのは光栄です。よろしくお願ひします」

とにかく、今夜はクリステルは、せつかく取つた部屋に引き取つてもらつた。

その日の晩は、シユウはほぼサラの抱き枕状態となり、男の子として非常につらく悩ましい一夜となつた。だが、やはりどこか肝が据わつてゐるのか、夜半にはすっかり寝付いてしまつてゐたのだが。

翌朝、例の男女の処遇を考えていたシユウは、思い立つて、村役人を呼び出した。

「あの山賊が使つていた馬車なんですが、一台お譲りいただけませんか？」

「ほう、それは」

「僕たちの馬車ももう手狭ですし、今回何人か同行者が増えますの

で

「なるほど」

「今回の件では、こちらの皆様にも費えが多く大変でしょう? 僕たちとしても、馬車を譲つていただくに当たって、金貨一枚を」用意いたします」

「!……わかりました。そう仰っていただけましたら、私の権限で、お譲りいたしましょう」

やはり昨日感じていたように、この男は金に汚いようだ。もつとも、下手に騒がれてノイスバイン王国の時のよう、王宮まで出頭しろなどといわれては溜まらない。

「それと、これはお役人さまに、僕たちからの心ばかりのお礼になります」

シュウはこの役人に心付けを渡してみよつと思つて、サラに金貨一枚を彼の手のひらに置いた。

「こ、これは過分な」

「いえいえ、これからなかなかお骨折りな作業もありでしょう。お役立て下さい。

僕たちは、大変申し訳ありませんが先を急ぐ旅路です。お手伝いできないお詫びとしてお受け取り下さい」

「では、かたじけなくいただいておきます。馬車のほうは、あの一番大きいのをご用立てしますので、どうかお使い下さい」

「ありがとうございます」

「これで、よつやくこの村から退散できそうだ。」

「あらためて紹介します。僕はシュウ、彼女はサラ。ジルベルに、クリスティルです」

「わ、私はベンノーです。彼女はアルマ。必ず力を尽くしますので、お願いたします」

結局、二人には雇われてもうつことにした。

行く先も身よりも仕事もないというのには気の毒だったし、なによ

り、純朴そうな二人なら、一緒に旅していても大丈夫そうかな、と思えたからだ。

なによりありがたいのは、一人とも、馬の世話が出来ることと、御者を勤められることがわかつたことだ。

これで、サラやシユウにも自由な時間が生まれることになる。炊事や洗濯もアルマが出来ると言つことだったので、働いてくれる彼女たちには申し訳ないが、ほんとうに楽をさせてもらえそうだ、と、シユウは嬉しかつた。

山賊の親分が使つていた奴隸運搬用の馬車は、頑丈なのが取り柄なくらいで、あまり乗り心地も良くないし、道具も揃っていない。ひとまず、クリステルと従者一人に使ってもらうことにして、最低限、この村で買える物資を買い込み、一行は昼前にはこの村を旅立つた。

万が一ヒルゼルブルツ王国の中核までにシユウたちの話題が伝わつたときに、出来るなら、国境を越えておきたいと思つたのだ。だが、思ったよりあの村役人の小悪人ぶりが役に立つた。

ほとんど自分の手柄と言うことにして、山賊の財産やら国からの褒賞を自分の中にしたらしい。

シユウたちにとつては、ありがたいことだつた。

こうして一行は、5日かけてヒルゼルブルツ王国を出て、『始まりの街』レオナレルのある神聖ネカスタイルネル国に入つていった。

アンセリ村を旅だつた日の午後、昼食のため休憩を取つていた草原のこと。

「そもそも、どうしてクリステルさんは捕まつたんですか？」

まだ一度もその真価を見てはいないが、話を総合すれば、クリステルは相当な精霊魔法の使い手でもあり、護身用に弓と剣が扱えるような戦士でもある。

それが、山賊風情に捕まる、というのはなかなかシユウには理解しにくかつたのである。

「泊まつた宿がグルだつたのです」

クリステルによると、捕まつた日に泊まつた宿で出された薬に、しごれ薬の毒が仕込まれていて、そこで身ぐるみ剥がされたあげく、今もつけている『隸属の首輪』をはめられたということだ。

この首輪にはなんらかの機構じくみが仕掛けられていて、逆らつたりすると一瞬で命を奪つようになつていてのこと。

そして、彼女が魔法を使つたり、誰かが外そつとしても、その効果が発動することを山賊どもに教えられ、今までなにも効果的な手が打てなかつたことを説明してくれた。

「サラさん、たとえばですけど、直接クリステルさんに魔法かけて、それから首輪外せないかな？」

「どんなトラップにもよるけど、まずクリステルさんにプロテクトかけて、そのあとで魔法避けにリフレクトと、毒なんかのためにレジストなんかをかけてから外せば、何とかなるかも知れないわね」

「本当ですか？」

クリステルは、二人の会話を聞き、嬉しそうに立ち上がつた。

「いえ、可能性の話です。私は、ほかの方法があるんだつたらそつちで外した方がいいと思つ

サラはリスクを思つて及び腰だつた。

「いえ、いつ誤作動して死ぬかもわかりません。だったら、一刻も早く外していただきたいです」

「……」

「お願いします。もし、わたくしに何かあつたとしたら、ここにいる皆様が証人です。サラさま」

「わかった……」

サラも渋々、引き受けることにしたようだ。

安全のため、一同から離れた草原で解呪をはじめて見ることになつた。

とりあえず、まずはサラ自身に、〈プロテクト〉〈リフレクト〉〈レジスト〉をかける。そして、イスに座つているクリスティルに、まずは〈プロテクト〉をかけてみた。

すんなりプロテクトがかかつたことを確認し、続いて、〈リフレクト〉〈レジスト〉を重ね掛けする。

慎重にサラはクリスティルの背後のつなぎ田をいじる。留め金らしきものを見つけ、サラが指で押し込み、カチッと外れた瞬間

ズーン！

激しい爆風が周囲にこだまし、少し離れて様子を見ていた一行の肝を冷やさせた。

「おい、大丈夫……」

爆煙が晴れると、そこには二人の姿はなかつた。

あわててシユウが駆け寄ると、焼けこげた爆心地の少し先の草むらから、二人の女性の笑い声が聞こえてきた。

のぞき込むと、爆風で飛ばされたのだろう、後ろからサラに抱きしめられ、サラの上に寝ころぶクリスティルと、草むらに延びているサラ、二人の笑顔があつた。

「肝が冷えましたよ」

シユウもやつと、こわばつた顔をほぐした。

「サラさま。わたくしはあなた様に命を救われました。このご恩は、

いつかきっと、お返しいたします」

「ふふ、そうね、いつか、きっとね」

出会つてからはじめて、屈託なく会話を交わす一人だった。

その日の夜、宿屋で食事をしているとき、クリステルはふと
「シユウさま」

と、思い出したよつこ、声をかけてきた。

「シユウさまは魔法をお使いにならないんですね？」

「うん、使つたことないよ。覚えたいとは思つてるけど」

「申し訳ありません。そのことなのですが、レオナエルに向かうの

でしたら、少し思い当たることがござります。出来れば、レオナレ

ルまで、一切練習などなさらずにいていただけませんか？」

「うーん、いい機会だと思つてたんだけど、どうして？」

「話すと長いのですが、要するに魔法を使つたことのない状態が好
ましいのです」

「わかりました。じゃあほかのことでもします」

アンセリを立つた初日には、そんな出来事があった。

神聖ネカスタイル国は宗教国家だ。

レジナレス大陸のほぼ中央に存在する国家で、全大陸の陸送のハ
ブに当たるため、スポートに当たる街道は他国家に比べても整備さ
車輪

れていて、途中にも宿屋を擁する街が繁栄している。

大國家行きの各街道はそれこそ石畳で舗装されていて、それが各関所まで美しく延びている。

街道の石畳は、國家の豊かさの象徴だが、同時に、治安の良さの現れでもある。

ネカスタイルは、他の国に比べ、軍事力にも特色がある。ゲームではジョブクラスのひとつだった『聖騎士』が存在する。王家や貴族家に所属する軍事力である騎士とは違い、教会に属する軍事力だ。

ネカスタイルでの治安維持は、この聖騎士たちが中心となり、そこに都市警護や周辺護衛などの武力が集約されて運営されている。早い話、とても住みやすい都市なのである。

『始まりの街』レオナールは、ゲーム中ではスタート地点に当たると言つこともあって、大陸一の大都市だった。

それはどうも、この世界でも同じようだ。

大陸の商業・流通・文化・芸術の中心であり、また、宗教上の聖地でもある。

華やいだ雰囲気と、絶え間ない人間たちの雑踏。

この街を目指して寂れた裏街道をひた走ったショウたちにとつては、心沸き立つ思いのする光景が、レオナールには広がつていた。

ショウは、この都市に来たらまずやううと道中考えていた事がある。

ショウとサラの持つ財力は、おそらくこの街で邸宅を所有することなじ充分可能なものだ。

大陸のほぼ中央ということもあるので、これから自分たちがこの世界を調査するに当たつての『拠点』にしたいと考えていた。

ショウたちは、この地でもつとも華やかなホテルに宿を取り、まずは空き物件の調査を始めたことにした。

だがその前に……。

まずは、ゲームとこの世界の違いが知りたくて、ゲームにあつたさまざまな施設を見て回ろうと思つた。

ショウがサラにそう提案すると、サラも「一つ返事でついてきた。クリステルに金貨を100枚ほど渡し、ジルベルやベンノー、アルマと彼女自身の身の回り品や新しい服の購入などを頼んだ。

30日近い旅は、やはり旅装に汚れやほつれが出ているので、せつかくだから、贅沢に新品を整えて欲しいと思つたのだ。

ベンノーやアルマは恐縮して遠慮してきたが、クリステルには、彼らにも数着の普段着と正装、そして、いわゆるお屋敷勤めのための服などを数着ずつ見積もるようにお願いしておいた。

同様に、クリステルとジルベルにも、数着の正装、普段着などを見積つて購入するよう話しておいた。

ゲームスタート直後に登場するチュー・トリアルの館は、巨大な大衆酒場になつていて。

そこを入り口からちらつと覗いた二人は、昼食で賑わいを見せ始めたその店には入らず、次の拠点を目指した。

ジョブ・チエンジの神殿。

プレイヤーレベルとジョブレベルが一定数以上になると得られる新ジョブをステータスに書き加えるための神殿だ。

だがそこも、寂れた無人の古い神殿があるので、特に人で賑わうような雰囲気を感じさせなかつた。

クエストが交付される『冒険者の館』は、いわゆる冒険者ギルド的な存在になつていていた。

壁には、さまざまに依頼が書かれた羊皮紙がきれいに貼り出されていて、それを一個一個真剣な表情でながめて通る冒険者風の男女が多數いた。

「……わかつてはいたけど、やつぱり、違うのね」
サラは少し、肩を落としていた。

「そうですね」

シコウは努めて明るい声を振り絞つて、言葉を継いだ。
「まあでも、めげずに頑張りましょうよサラさん。いの世界ここだつて、悪いことばかりじゃなかつたじやないですか」

「うん」

シコウはサラの肩を抱いて、建物から出ていった。

不動産屋がないかと探してみたが、こうした都市の場合、不動産屋は平民クラスの物件、それもおもに賃貸を扱うもので、邸宅が欲しいとなると、どうも勝手が違つようだ。

この都市には、5人の支配層　評議員がいて、それぞれ、軍事・経済・司法・行政・治安を担当している。

その評議員の、おもに治安を担当する者の配下に、ビツやら、邸宅などを管理する組織があるらしい。

とりあえず、シコウとサラはホテルに戻つて、支配人に相談してみようと決めた。ホテルの支配人というのは、意外に世間に顔が利くものだからだ。

支配人は、白髪交じりの小柄な紳士だった。

シコウはまず、身分を明らかにするために、ノイスバイン王の発行してくれた手形を支配人に見せ、それから、自分がこの街で邸宅を構えたいことを相談してみた。

「なるほど、そうなりますと、評議員アロイス様のご裁可が必要になるかと存じます」

アロイスというのが、件の治安担当評議員の名前のようなだ。

「まずはアロイス様のお屋敷に出向き、掛かり付の文官などに話を通されてはいかがでしょうか？」

支配人は、自らの机で羊皮紙に自らの名で紹介状をしたため、シ

シユウに手渡してくれた。

「これをお持ちいただければ、取り次いでいただけるかと存じます」「ありがとうございます。これは些少ですが、ホテルの皆様への感謝の印にお受け取り下さい」

シユウは、チップとして金貨5枚を支配人に手渡した。過剰なチップではあるが、支配人はためらうことなく、そして、へつらうこともなく堂々とそれを受け取り、さまになつた礼をした。とりあえず明日は、サラと一人でアロイスの屋敷に行つてみよう。そう決めて、シユウは皆が待つ自室に戻った。

今回借りた部屋は、それぞれの寝室になる個室が5個、部屋の中は30畳はあるうかという大広間になつていて、食事もこのリブールで出来る。

室内に専用浴室もあるというとてつもなく贅沢なスイートだった。宿泊費は一泊金貨一枚。食費と部屋の利用料を含んでいる。

シユウは人数分の食事の給仕をしてくれたボーイにチップを渡そうとしたが、

「支配人より、『すでに多大な心付けをいただいている』とかがつております」

と、受け取ろうとしなかつた。教育の行き届いたホテルだな、とシユウは感心した。

一同はすでに入浴を済ませ、今日買った真新しい服に身を包んでいた。

やはり、こうして落ち着いて身なりを整え、贅沢な食事を前にすると、誰しも心が華やぐ気持ちになる。だが、そうでない者たちもいた。

ベンノーとアルマは、従者でありながら、一同と同じく正客としての待遇を受けていることに、とまどいを隠しきれなかつた。

不思議なことに、シユウもサラも、主従というものに全く頓着し

ていな風だつた。

ベンノーもアルマも、従者をした経験のない一介の農民だつたの
でよく解らないのだが、自分たちの主の異常ただけはよく解つてい
た。

だいいち、従者である自分たちの日常の服まで買いくつえるような
主はまずいな。

せいぜい、屋敷住まいの従者の制服を用意する程度だらう。

こうした浪費が、巡り巡つて自分らの備財になるのでは、と恐れ
たベンノーは、つゝ、シユウにそのことをおやるおやる聞いただし
てみた。

「いえ、ここまで良くやつてくださいましたので、僕たちからのお
レゼントだと思ってください」

質問の真意を機敏に察したシユウは、そうこつて一人を安心させ
た。

「本来は従者は食事は別に摂るものだと想つます」

アルマも、主たちの食卓に座らされたことが居心地悪く、そうい
うと、
「そなんですか？ でも旅の途中からずっと一緒にだつたじゃない
ですか」

と、これもまた全く意に介さないことを言つ。

「気にしないでどんどん食べてください。足りなければばくらでも
注文しましょう。今日はあれですよ、無事に着いたお祝いみたいな
もんです」

欲しかつたらお酒も飲んでくださいね、シユウはベンノーに言つ
が、かれらは恐縮してしまつていて、あまり食べたものの味もわか
らないほどだ。

食事が終わると、応接間らしきソファーの部屋に移り、ベンノー

ら従者も交え、くつろぎつつ、今後の相談を皆とするにした。まずシユウから、自分たち二人がこの世界の人間ではなかつたこと。ここにはどういう手段かわからないが連れ込まれてしまつたこと。そして、そうした謎を探す手がかりになればと思つて、この街に來たこと。手がかりになりそうな場所は全滅だつたこと、などを話した。

その話は、ジルベルにとつてはびっくりといふとらしく、ベンノーとアルマには、理解を超えた内容だつた。興味深そうに聞いているのはクリステル一人だつた。

「で、まあ今後なんですけど……」

シユウはまず、この町に邸宅を構え、今後の活動の拠点にしたいこと。そのために評議員に会いに行き、手頃な物件を購入する予定であることを告げた。

あとは、シユウ個人の道楽として、鍛冶工房を手に入れたいと思つていた。

騒音の問題もあるのでおそらく、邸宅では不可能だらうとおもう。さらに、馬はともかく、馬車をもつと機能的なものに新造したいと思つっていた。

そして、邸宅を維持管理するための人材を確保したい。

シユウは一通りそんなことを一同に伝えた。

「ところで、今後のことですが、なにか希望や提案がある方は居ますか？」

シユウは、サラも含め、一同に問い合わせた。

「僕としては、一応以前土地勘があつた南西の方面を旅したいとは思いますが、どうせこの分では見知つたものもないんじやないかと思ひます」

「私もシユウ君と同じだとおもつ」

「我は特にやりたいこともないの」

従者の一人は、口を挟むまいと考へてゐるようで、一切発言する

ことはなかつた。

「それでは…」

クリステルがこの場の発言を引き取つていつた。

「まずわたくしは、この町でお会いしたい人がおりますので、シユウさまにご同道いただきたく思います」

翌日。

とりあえず、どこかに案内したいというクリステル、そして評議員公館に邸宅斡旋の依頼に行くシユウとサラの3人で、今日は出かけることにした。

まず評議員公館の門番に、来意を告げ、ホテルの支配人が書いてくれた紹介状を手渡した。

紹介状を見た門番は、当初のうさんくさそうで面倒そうな態度を豹変させると3人を公邸入り口から建物の中に通し、なんらかの許可を得るためにどう市民でこつた返す窓口前を素通りし、やや広めの面会室といったような一室に案内してくれた。

「こちらでお待ちを」

門番はそういうと退室していった。

ほんのしばらくすると、3人が通された扉とは違う、もう一つの扉が開き、大変身なりのいい貴族然とした男が、扉を開けた従者と共に室内に現れた。

「紹介状は拝見した。わたしはホラーツ。アロイス評議員の秘書だ」「はじめましてホラーツさま。こちらはサラ、クリステル。僕はシユウ。よろしくお願ひします」

「さ、かけたまえ」

まずシユウは、身分の証明のためにノイスバイン王の手形を見せ、支配人が紹介状を書いてくれた経緯を手短かに話すと、本題である、邸宅購入の件を放した。

予算を聞かれたが、相場などが一切わからないシユウは、予算よりもまずは物件を見せて欲しいと頼む。ホラーツは従者に、空き物件についての資料を持つてくるように命じた。

その空き時間を使い、シユウは、鍛冶場を購入したいこともあわせて相談してみた。

「一般には、鍛冶場は工芸のギルドが取り仕切つてゐる。表通りにある店舗のある鍛冶屋になれば、ここでも扱いがある」

ホラーツはいった。

従者が羊皮紙の束を抱えてきたので、ついでに鍛冶場のある店舗も見せて欲しいといふと、ホラーツは再度、従者に資料を取りに走らせてくれた。

物件は5軒ほどの空きがあるようだつた。

そのうちの2軒にシユウは心惹かれた。

1軒は、街の中心にある教会施設のすぐそばで、5軒のうちもつとも規模が大きく、建物が大きい。立地条件も最高らしい。だが、庭がない。

もう1軒は、教会から南に2ブロックほど下つた一角にある。

建物は従者用の個室40、1階は食堂施設と玄関ホール。二階に応接間と来客宿泊施設があり、三階に執務室と個室、主用の居間と寝室がある。建物自体は1軒目の半分ほどの規模だ。

そして、この物件には、庭があり、厩舎があるようだ。

物件金額は、2軒目のほうが半額近く安い。

一瞬悩んだが、シユウは2軒目に即決した。

店舗付の鍛冶場も、幸いなことに南ブロックにあった。

邸宅から5分ほどの距離だらうか？

こちらもあわせて購入することにして、早速価格の確認となつた。

「一つ合わせて金貨200でどうだらうか？」

ホラーツは言つた。値引きしてくれたらしい。

「お願ひします」

シユウは右手を出した。ホラーツはしつかり握り返した。

「毎年、購入費の5%が地税として徴収される。レオナレルの市民には人頭税は免除される。ただし、奴隸がいる場合は、人頭税は主人にかけられる」

ホラーツは、さうこうと、一枚の羊皮紙を取り出し、サインをさせた。

物件所有者のサインはサラにさせる。

いつもシユウが従者に見えるので、いろいろ説明が面倒くさいのだ、話せば長くなるので、サラを立てる方が話が早い。

「鍛冶場のほうは相当荒れている。手直しが必要かも知れないが勝手にやってくれ。必要ならつぶして建て替えても良いが、近隣とは揉めないでくれ」

「職人の手配などはどうしたらよいでしょうか？」

「ハ芸ギルドで依頼してみると良い。ついでに邸宅も見て貰うといい」

「ありがとうございます。あと、邸宅のほうの使用人ですが、どこで依頼するのがよいでしょうか？」

「そうだな、普通であれば商業ギルドだらうが、……シユウ殿が持ってきた紹介状の主にまずは相談してみると良かう。ホラーツにそういうわれたと言つてみると良い」

「ありがとうございます」

シユウは金貨200枚と、今年の分の地税10枚を差し出した。先ほどサインをしたのが権利書だつたのだろう。ホラーツは4枚の権利書を一組ずつ割り印すると、片側ずつをサラに手渡した。そして、納税を証明する書類にサインをし、それもサラに手渡した。

「これでこの物件は君らのものだ。ようこそ、レオナレルへ」
ホラーツはそういうと席を立ち、去つていった。

「では、サラさんはこの書類を持って、ホテルの支配人に使用人のことを相談してください」

「うん。シユウ君は？」

「僕はまず工芸ギルドについて、リフォームの相談をしてみます。ついでに馬車も。

そのあと、クリステルさんの用につきあいます」

「わかった。私が居ないからってシユウ君に手を出しちゃダメよクリステル」

「承知しました」

一人の美女の「冗談が本氣かわからないやりとりに挟まれ、シユウは苦笑する。

とりあえず、目的地に別れた。

工芸ギルドは、繁華街である南ブロックの根本、つまり教会のすぐ近くにある。

ホテルは東ブロック、評議員の公邸は教会のある中央ブロックになる。

空き家になっていた邸宅は南ブロックにあるので、おそらく豪商か誰かがオーナーだったのだろう。

工芸ギルドに入る。

やはりギルドとかは、その所属するものたちの匂いが付くなあ、とシユウは思った。

冒険者ギルドというのは、こうだ。

誰かが扉から入ってくる。

誰も彼もがその顔を見て、相手の值踏みをはじめるが、極力、見てみないふりをする。

そして、たいていの場合、冒険者ギルドで値踏みをする連中のつける値札は、その人物の実力より安く付く。

先ほどいった評議員公館はまあ、典型的な公務員のそれだ。

休まず、遅れず、働く。

やつかいそうな来客は特別待遇でとつと交わし、あとはまあ、

ほどほどだ。

「芸ギルドは。

なんとまあ無愛想で、無関心で、静かなところだらう。
みな一様に不機嫌そなのは、そうすることで、余計な会話をかけられたくないからだらう。

壁の依頼をながめる者も、みな狭い範囲　　自分の分野のみを見たら帰るか、依頼書を手にとつて受付に行くが。
その受付も、こうした空氣の中だからだらうか。かわいい女の子など置かない。

みな、老齢で、職人たちに輪をかけたような頑固で偏屈そなじいばかりだつた。

「すいません。僕はシユウ。アロイス評議員のところのホラーツ秘書から、こちらに依頼すると良いと聞いてきました」

「……そつかい。そこの扉から中に入つて突き当たりでまちな」予想を裏切らない無愛想さだ。シユウはちょっと嬉しくなつた。

シユウたちが、フロアと中を区切る扉をくぐり、突き当たりで待つていて、非常に背の低い老人がやつてきていた。

「評議員の処からの客つてのはあんたかい？」

「はい、シユウです。依頼にきました」

「……はいんな」

田の前の応接室の扉を開けると、老人は先に入り、ソファに座つた。

「ではあらためまして。僕はシユウ、こつちはクリステル。
今日は、購入した邸宅と店舗の手直しを依頼しにきました」

「ほう」

シユウは、控えておいた物件の住所を老人に示した。

「ほう、あれを買ったか、たいしたものだな」

「そうですか？」

「ああ、見る目がある。ほかに何軒か候補があつたろう」

「ええ」

「そこからあれを選んだならたいしたもんだ」

「どうしてですか？」

「あれは、わしが建てた」

……こういうタイプは、自尊心が強いくせにダメな人間が多い。シユウは少し緊張した。

それをめざとく老人も感じたのだろう。ひとつ小さく舌打ちすると

「いやなガキだな」

と、聞こえるほど小声で言つた。

「それはどうも」

シユウも、あえて、買い取つた。

「あの邸宅なら手直しはまあ必要あるまい。問題は南3ブロックの店だな。

あそこはもうだいぶいけない。建て直したほうが早かる」「ではそのように。邸宅も一通り確認をお願いします。その後、見積もりをお願いします」

見積もりといわれて、さらに老人はいやな顔をした。

見積もりを出せというたぐいは、金にうるさい。

「店のほう、建て直すにしても、工房は鍛冶場でいいのか?」「はい。鍛冶場に必要な内装や工房もすべてコミでお願いします。一階には住居を用意してください。使用人を住ませるかも知れませんので。

あとは今ままの店を踏襲してくれればけつこうです」

それだけ言うとシユウは立ち上がつた。

やむを得ず老人も立ち上がる。

「手付け金がいるなら今払います。見積もりは3日以内に。何かあればホテル・レオナレルまでお願いします」

そういうと扉を開け、クリステルを先に退室させながら、シユウは振り返つていった。

「そういうえば、僕はあの店で武器や防具を作つたり売つたりするつもりですが、このギルドへの登録は必要ですか？」

「そうだな」

「ではその手続に必要なものも、見積もりの時に用意してください。あと、初対面の者には最低限、名前ぐらい名乗るべきだと思いますよ？」

やる気がないのなら、どうか後進に道を譲つて隠居してください。

なんならついでに、このあと評議員のところに行つて報告しますよ？」

では

「ま……まて」

はじめて、老人の顔に緊張が走つた。

どう見ても小僧っ子の使いにしか見えなかつたこのガキが、どうやら自分の交渉相手だとやつと気がついたのだ。

「無礼は詫びる。わしはこのギルドの長を預かつてゐるイエフだ」

そのあと、あらためてイエフは職人頭などを呼び寄せ、シユウはもう一度条件などを伝え、彼らはそれをメモに取り、明日、ホテルに鍵を取りに来るといつて別れた。

「あきましたわね」

クリステルは、工芸ギルドから出ると、ため息混じりの苦笑を浮かべつつ言つた。

「全くです。工芸ギルドってどいもあんなんでしょうかね？」

シユウはそういつたのだが

「いえ、シユウさまにあきれたのですよ」

クリステルに笑われてしまつた。

クリステルが案内したい場所というのは、街の北ブロックのかなり遠いところらしい。

ホテルのドアマンに馬車を頼み、行き帰りの足になつてもいいつことにした。

厩にあづけた自分の馬車を出すのは、馬具の装着や馬車の準備が手間だからだ。

高級な送迎馬車に揺られ、目的地までたどり着く。

南に広がる商工業の街や東に広がる宿屋などの歓楽街。

西に広がる貴族たちの街に比べ、北に広がるのは平民や貧民が多い住宅街だった。

その果て、都市城郭の北門にほど近い林のそばに、一軒の小さな煉瓦造りの家があった。

その家の前に馬車を止め、御者にここで待つように告げると、クリステルはショウを案内し、その家の中に入つていった。

「おばあさま、ご無沙汰いたしております」

おばあまといわれた女性は、ショウにほどう見ても30・40台にしか見えない。

だが、ハイエルフの一族なら、見た目でショウが年齢を当てるような日は、たぶん一生来ないだろう。

見ると、クリステルにどこかしら面差しが似ている女性だった。

「お客人をお連れしています。こちらはショウやね。わたくしの命の恩人です」

「あ、ショウと申します。はじめまして」

「ようこそショウ殿。わたしはこれの外祖母で、カトヤといつ。クリステル、お前が選んだのはこのかたかい?」

「はい、おばあさま」

「どれ、ほつ……」これはたまげた

カトヤと名乗ったおばばおまは、シユウを鑑定するよつじつと

ながめ、

「なるほど」

満足そううなずいた。

そして、おもむろに部屋から出るとじばらく物音を立てていたが、やがて、ひとつのかばんを持ってこちらに来ると、そのかばんをシユウに持たせて、言った。

「では行くぞ」

「えーと、どうひり?」

「決まっておるつ、里帰りだ」

「今からですか?」

「当然だ」

「おばばさま、シユウさまにも」都合がありますので

クリステルは、このおばばさまの性格をよく解っているのだろう。苦笑しながら間を取りなした。

「そうか、なら今夜は泊まっていけ」

「いえ、まだ何日か街の方で仕事が残つてありますので」

「なんと。誰かに任せていけないのか?」

「おばばさま」

「おお、そうか。ところで、シユウ殿は今どこにあられるのだ?」

「ホテル・レオナールです」

「なんと、そうか。あそこはわしも一度泊まりたいと思つておったが、ついに機会がなかつたわ」

「えー、と。じゃあご一緒しますか?」

クリステルが目線で『やめろ』と訴えたがもう遅かった。

「よういうた! ではご相伴にあずかるつとするかな

カトヤはシユウにカバンを持たせたまま、真っ先にそこへ止まつていた馬車に乗りると、

「何をしておる、早く乗らんかい」

あつけにとられる一人を急かせた。

カトヤというクリステルの「おばさま」の案内と接待を彼女に任せ、シユウは、ホテルの支配人と話すために、カウンターで彼を呼び出した。しばらくすると、ボーイが彼を支配人室まで案内してくれた。

「お帰りなさいませ。お話はサラ様から伺っております」

支配人はそういうと、シユウにソファを勧めて自らも座った。

購入した邸宅と店舗の住所を支配人に伝えると、なるほど、良い買い物をなさいました。と微笑んだ。

「それで、ホラーツさんに使用人の斡旋についてお尋ねしたら、支配人さんにお話しするように彼が言っていた、と伝えるように言われたんです」

「なるほど、彼らしい」

「お知り合いでですか?」

「友人ですよ」

具体的にどのような人材が欲しいのか、と支配人は尋ねた。

「すべてです。執事長、メイド家政婦、料理人、馬丁や庭師など……」

「馬丁や庭師もですか?」

「ええ。とは言つても庭仕事や馬の世話などが常時あるかわかりませんから、出来たら自分の仕事を自分で見つけてくれるような人がありがたいですかね?」

「そうですね。それから?」

「僕たちは揃つて旅に出ることもありますから、というかもう早速その予定なんんですけど、まあそんな状態なので、執事長には、人付き合いが上手で、金勘定に明るく、不正をしない方が欲しいんですけどとにかく、信頼関係を築く時間があまりない。ならば、高給であつても信頼できる人が欲しい。」

「それはそうでしょうね。ほかには？」

「そうですね、それ以外の方は、まあ執事長にお任せしたいです。たとえば、育てていただけるのであれば、未経験の人を雇つていただいても構いませんし、人数も、必要と思われるだけ、執事長の裁量で人事をこなしていただきたいですね。

もちろん、部下の教育もお願いしたいです

「それは条件が厳しいですね」

「ですね……」

「お店のほうはどうなさるおつもりですか？」

「そうですね。店はひとまず、今僕たちの従者をしてくる一人に任せみようかなーとか考えてるんですよ」

「ほう」

ベンノーとアルマを屋敷で使うにせよ、かなり長い期間の教育が必要だらう。

「どうせ教育が必要だつたら、まずは武器防具の商いを覚えさせ、彼らに店番を頼めばいいのではないか。シユウはそんなことを考えていた。

「どうせおそらくあの物件は建て替えになりますんで、開業はまだまだ当分先の話になります。

その間、あの二人を預かってくれるようなお店があると良いんですけど」

「それは、修行のために無給で、という意味ですか？」

「はい。うちの従者ですし、給料はこちらで払います。

それに、聞いたところ、あの二人は読み書きと計算が出来ますから

だから、山賊たちに殺されず、奴隸としての値打ちを認められたようだと、一人は言つていた。

「なるほど」

「店が完成したら、あの二人をあそこに住まわせよつと思つています。

まあそれまでは邸宅のほうで寝起きをしてもらひればいいかと思いま
す」

「奴隸はお使いになりませんか？」

「必要なら。それは執事長の裁量に任せます」

「わかりました。

私が知る限り、そうした条件で働く人間は、今のところこの街
で一人しか思い浮かびません」

「そうですか。お手数ですが、ご紹介いただけますか？」

「いえ、その必要はございません」

支配人は、にやりと笑つて、いじついた。

「わたくし自身ですので」

シユウは驚いた。

この支配人は、これほどのホテルで運営トップを任せている。
それは確かに、シユウが求める最良の人材である。

「え……そうです、ね？」

「私ではござるに届きませんでしようか？」

「いえ、反対です。支配人さんほどの方が、僕たちのような不得体の
知れない者のために、現職を捨てて来ていただけるとは考えていま
せんでしたので」

「ノイスバイン王に『友』と呼ばれ、このホテルで最高級のスイー
トに居続けをなさつて、邸宅と店を一括で購入なさる。そうした方
にお仕えするというのは、これはなかなか魅力的だと思われません
か？」

「そういっていただけるのはなんというか、面映ゆいですが……。
わかりました。それでは支配人さん……」

「これは失礼。名乗つておりませんでしたな。私はラルス・フルス
トと申します」

「それではラルスさん。あらためまして。

シユウ・タノナカです。あなたを僕の執事長としてお迎えしたい

のですが、お引き受けいただけますでしょうか？」「喜んでお受けいたします」

二人はそのまま握手を交わした。

「ところでシユウ様。私の報酬はどのようになりますでしょうか？」

「今年の年収はどのくらいでしょつか？」

「年に、金貨15枚です」

「わかりました。その2倍お支払いいたします」「承りました」

ラルスは早速、この部屋に副支配人を呼ぶと、

「自分は近く引退をするので、5日をめどにこの部屋に引っ越しせるよう準備をするように」

といって、副支配人の目を白黒させた。

「そうですね、明日からは支配人の服を着て、支配人代理を名乗る」と良いでしょ。

……あとをお任せしますよ。

何人か引き抜いていきますから、後任の選定もお願いします」

どうやら本気らしいと副支配人は悟り、降つてわいた昇進の興奮に頬を紅潮させながら、美しいお辞儀をして退室した。

「ところでラルスさん」

「どうか、ラルスとお呼び下さい。『主人様』

「いや、それはどうしたものかと」

シユウは苦笑した。

「とにかくラルスさん。

状況は今お話ししたとおりです。出来ればすぐに旅に出たい事情があるんですが、少なくともあと数日は、さまざまな準備をしなければなりません。

ですので、その間に、人事も含めてラルスさんにも準備のお手伝

いをいただきたいのです。よろしいでしょうか？

「かしこまりました。ご主人様」

「ご主人様はお辞め下さい。なんか背中がむずむずします」

シユウは苦笑を深めた。

「……わかりました、シユウ様」

「ありがとうございます。」

それで、まずは前払いとして金貨30枚をお支払いいたします。

それとは別に、支度金として金貨10枚。」

シユウは早速、計40枚の金貨を積み上げる。

「ラルスさん」自身の契約書をお作り下さい。お持ちいただいたらサインいたします。

それと、早速、屋敷の人員の手配をお願いいたします。

明日は、ホラーツさんが邸宅の引き渡しを、工芸ギルドから、工事についての立ち会いなどに人が来ることになつています。そちらの同行をお願いします」

「承知しました。少々お待ち下さい」

ラルスは、自分の机に座ると、机から羊皮紙を取り出し、流れるような筆致で書類を作り、シユウに手渡した。

シユウはその文面を読み、即座にサインをした。

シユウがサインをしている間にラルスは、手帳に、今伝えられた内容をメモしていった。

「ラルスさん。

ちょっとと聞きたいんですが、ラルスさんは工芸ギルドの人脈とかに詳しいでしようか？」

「仕事柄、多少のお付き合いがござります」

「あそこのギルド長はダメです。」

誰か、あそことつきあつ上でこれは、という方をご紹介いただけないでしようか？」

「かしこまりました。」

序列3位に、ザールという男がおります。明日お引き合わせする

よう手配いたします。

しかし、どうなさいましたか？」

シユウは、昼間の一件をラルスに話した。

ラルスは、柔らかな微笑みを浮かべてうなずいた。

「なるほど、それはいけませんな」

シユウはそのあと、残りの案件をラルスと詰めていった。

買い取った店舗の工房についての要望や、店舗の設計について。

工芸ギルドに依頼したい、新しい馬車について。

屋敷の運営について。

ラルスは、内心で、田の前にいるこのあどけなさの残る少年に舌を巻いていた。

数十年の実務のプロとしては、まだまだ少年の思考や計算には穴がある。

それはもちろんそうだろうが、それでもいくつも、ドキリとさせられる視点や発想が随所に現れている。

この少年が年を経て老練したら、どれほど怪物になるだらう？

そう思つと、ラルスの心は久しぶりに高鳴つっていた。

「ラルスさん。たとえば、僕たちが旅のさなかでなにかトラブルにあつて、数年帰つてこなかつたとします。

その場合を考えた上で、今までの話でかかる費用も含め、総額でいくら、あなたにお預けしておけば安心か、その費用を出してもらえますか？」

「承知しました。それでは、明日の見積もりなどを聞いたあとで、計算しておきます」

その後、シユウはラルスを伴つて部屋に戻つた。

そして、一同に

「僕たちの邸宅の執事長をお任せすることになりました。ラルスさ

んです」

と、あらためて紹介した。

翌日、物件の引き渡しが終わると、工芸ギルドとのミーティングが始まった。

ラルスがどう手を回したのか、工芸ギルドからは、例のザールという男がやってきた。

打てば響くような頭の回る人物で、シュウは大変ありがたいと思った。

人間というのは不思議なもので、呼吸のタイミングひとつさえ微妙に違うと、それだけでそりが合わなかつたりするものだ。

「今後とも、よろしくお願いします」

言外にさまざまな意味をこめて、シュウはザールと握手を交わした。

工芸ギルドとのミーティングを終えたシュウは、ベンノーとアルマを呼び出し、買い物を命じた。

昨夜、ラルスの引き抜き後に行われたカトヤとの相談で、彼女が持ちかけた旅にかかりそうな物資を、一人に買いそろえてもらおうと思つたのだ。

二人との契約は、ラルスを通さず、シュウと直接結ぶことになつていた。

その契約書をラルスが作成し、サインを終えたあと、一人には金貨5枚ずつ支払つた。

見習いの相場は、金貨1枚などということもある世の中だ。

ただでさえ身の丈を超えた高級仕立て服やら大量の作業着を「えられて恐縮していた一人は、さらに恐縮をしている。

だが、昨夜シュウの話した一人の仕事については、ラルスがよほ

ど脅していたのか、一人は相当の決意を持っていたようだ。

「ベンノーさん、アルマさん。

」のお金はお一人への先行投資です。

あのお店をお完全にお一人に任せられれば、充分に元が取れると思
いますから、どうか頑張つてください」

シユウはそういうと、とりあえず、今日の買い出しについてお願
いしておいた。

大体どのくらいの費用がかかるかというのはラルスが見積もつて
くれたので、少しだけ余分に金貨を渡し、外で食事をしてくるよう
に伝えて送り出した。

そして、ラルスに預ける資本金の話になつた。

ラルスがいうには、総額は金貨3000枚。

これは銀行に預け、手元の小口は100枚ほど。」むづらはラルス
が必要に応じて銀行から出納するといつ。

シユウは了承し、一人で銀行に出向き、早速預金を行つた。

その他に、「シユウ商会」として登記した店舗の預金も、金貨1
000枚で行い、口座の管理を、しばらくはラルスに任せることと
した。

一人前の店主になつたとき、ベンノーに預ける口座である。

ほかに、万ーのためにシユウ自身の口座も作つた。

これには金貨を5000枚預け、同様に、ラルスに預けることと
した。

「驚きましたな、シユウ様は一体、どれほどの金貨をお持ちなので
すか?」

「手持ちあと7000枚はありますよ
これにはさすがのラルスも驚いた。

シユウにしてみれば、この金貨は、ゲーム中に持つていたアカウ

ントがそのまま金貨としてアイテムガジェットに入っていただけのことだ、あまり感慨はなかつた。

だが確かに、この世界の常識を覆すだけの所持金ではあつただろう。

平民の四人家族が、年に金貨5枚もあれば、不自由なく暮らせるほどの価値がある。

それを、これほど若い男が持つているのは、異常事に違いない。ラルスは、昨夜のサラの話から、彼女もまたシユウとは別口に資産を持つていてることを聞いていたので、おそらく同じくらい持つているのだろうと想像した。

道理で、この一人の金遣いの荒さは理解が出来るといひであった。

サラとシユウにとって、邸宅が手に入つた大きな利点のひとつに、アイテムガジェットから、不要なアイテムを収納できるスペースが出来たことがあつた。

普段使用する武器や防具、そして、予備にストックするものを除き、ほぼ現在はデッドストックになつてゐる。

これらを邸宅の位置に収納すれば、いざれ武器屋を開業したときに、売りさばく商品になつてくれるだろう。

さらに、一人が買い込んだ大量の書籍や魔術書のたぐいも、読み終わつたり覚えたりしたら、屋敷の書庫に陳列できるのだ。

ラルスが、商業ギルドで店舗の登録や人材の募集、そして、ベンナーとアルマの修行を任せたる武器屋への依頼を行つてゐる間、二人は、屋敷の物置や書庫で、こうした不要品の整理を行つていた。

魔術書や百科事典、書籍のたぐいをひとつひとつアイテムガジェットから取り出しては並べる作業は、とても楽しく、そしてへたり込むほどに重労働だつた。

「こうしてみると本当に壮观ね」

サラは、へとへとになりながらも、奇妙な達成感に興奮していた。
なぜか人間は、一揃えになつていく『モノ』というのに奇妙な愛着を感じるものなのだ。

物置でも、取り出した武器防具を手当たり次第に格納していった。
きちんとした整理は、そのうち使用人たちがやるだろう。

帰宅したラルスは、書庫と倉庫を見て危うく悲鳴を上げそうになつた。

こんな高額な宝物を、これほど無防備に大量に放置して、あの二人は私に、どう守れというのだろう？

なんらかの防犯策が緊急に必要だ。ラルスは頭を抱えてしまった。なのにサラは、追い打ちをかけるように平然と言い放つた。

「なんか、どうせなら、もうひとセツト魔術書買いそろえて、きれいに並べてみたいわね？ シュウ君」

もうやめてくれ……

ラルスは心の中でうめいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503y/>

レジナレス・ワールド

2011年11月27日08時40分発行